めづか

1983

熊谷市教育委員会

序　文

熊谷市上中条は、市域の北東部に位置し、多くの古墳、条里跡、集落跡が存在することが知られています。

当地区では、昭和52年度から荒川左岸地区農村基盤総合整備パイロット事業が継続して実施されています。本市教育委員会では、この事業に伴った発掘調査を、毎年度実施しており、昭和56年度調査は、女塚古墳を対象として行いました。

本書は、昭和56年度調査の成果の概要を、写真、図面を中心にしてまとめたものです。

現在までに実施しました調査は、昭和52年度中条条里・東沢遺跡、53年度中島遺跡、54年度鎧塚古墳、55年度権現山古墳・常光院東遺跡、および、56年度の女塚古墳であります。また、昭和57年度には、さすなべ遺跡・光屋敷遺跡を調査しております。

これらの発堀調査によって得られた資料は、貴重な文化遺産として、学術研究、学校や社会教育に資するものであると考えます。こうした、調査・報告を契機として、多くの市民の方々が、埋蔵文化財保護について、より一層のご理解とご協力くださることを願ってやみません。

最後になりましたが、県文化財保護課、深谷土地改良事務所、中条星宮土地改良事務所、地元中条・大塚・中島地区住民の方々を初め多くの方々からご指導・ご協力いただきましたことに対して、深く感謝の意を表します。

昭和58年３月

熊谷市教育委員会

教育長　関根幸夫

女塚１号墳出土盾を持つ武人埴輪

例　言

1．本書は、熊谷市大字今井字女塚に所在する、女塚（めづか）１・２・４号墳の発堀調査概報である。

2．調査は、国・県の補助事業として、熊谷市教育委員会が主体となって実施した。

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長		関根幸夫
調査担当者	〃	社会教育課主事	寺社下博
事務局	〃	社会教育課長（前）	並木良輔
	〃	〃　（新）	岡田　詮
	〃	課長補佐	里見昌夫
	〃	〃　係長	岡田伸洋
	〃	〃　主事	金子正之
	〃	〃　〃	島野嘉寿子

4．本書の執筆・編集・写真撮影は寺社下博が担当し、図面の浄書は、中島勝男、草間サキ、樋口政江　江森光芳、稲村しず、中島慶子、金井和子、小橋具子、中島広子が担当した。

5．遺物実測図中の中心線について、実線は遺物を全く回転させていないことを、一点鎖線は180°回転させている事を、点線は任意に回転させていることを示す。

目　　次

序文

例言……ii

目次……iii

図版目次……iii

写真図版目次……iv

1・調査の経過……1

2・周辺の環境……1

3・中条古墳群……2

4・古墳の調査……8

a・女塚1号墳……8

b・女塚2号墳……24

c・女塚4号墳……38

5・周辺部の調査……42

6・まとめ……42

図版目次

1・遺跡分布図
2・中条古墳群分布図
3・今井支群分布図
4・権現山古墳平面図
5・権現山古墳出土遺物実測図
6・鎧塚古墳平面図
7・　〃　墓前祭祀址平面図
8・　〃　出土遺物実測図
9・大塚古墳墳丘平面図
10・　〃　石室実測図
11・　〃　出土遺物実測図
12・女塚1号墳土層図
13・　〃　平面図・（前方部石組を含む）
14・　〃　前方部外堤埴輪出土状況平面図
15・　〃　後円部　〃
16・　〃　出土遺物実測図（1）円筒埴輪
17・　〃　〃　（2）盾を持つ武人
18・　〃　〃　（3）　〃　・楽器
19・　〃　〃　（4）武人埴輪・土器
20・女塚2号墳平面図
21.　〃　土層図
22・　〃　出土遺物実測図（1）円筒埴輪
23・　〃　〃　（2）馬形埴輪
24・　〃　〃　（3）　〃
25・　〃　〃　（4）　〃　動物埴輪
26・　〃　〃　（5）人物埴輪
27・女塚1・2号墳出土円筒埴輪拓影図
28・女塚4号墳平面図
29・　〃　土層図
30・　〃　主体部平面図
31・　〃　出土遺物実測図
32・周辺部出土遺物実測図

写真図版目次

表紙　女塚１・２号墳航空写真

女塚１号墳出土盾を持つ武人埴輪

1　女塚１号墳前方部

2　〃　後円部

3　周溝

a　前方部南

b　くびれ部南

c　〃　北

d　後円部南

4　前方部

a　後円側より

b　周溝より

c・d　前方部石組

5　遺物出土状況

a　前方部

b　後円部東

c　〃　北西

d　前方部

e　後円部南

f・g　後円部北西

6　後円部墳丘裾

7　〃　東外堤埴輪列

8　前方部前面外堤埴輪列

9　くびれ部北中堤遺物出土状況

10　女塚１号墳出土遺物（１）円筒埴輪

11　〃　（２）盾を持つ武人・楽器・土器

12　女塚１号墳出土遺物（３）武人埴輪

13　女塚２号墳全景

14　墳丘北面遺物出土状況

15　女塚２号墳出土遺物（１）動物・円筒埴輪

16　〃　（２）馬形埴輪頭部

17　〃　（３）　〃　胴部

18　〃　（４）人物埴輪・及び周辺部出土遺物

19　女塚４号墳全景

20　〃　主体部

a　位置

b・c　検出状況

d　崩壊礫除去後

21　女塚４号墳主体部

a　蓋石除去後

b　遺物出土状況

c　断面南

d　断面北

Ⅰ．調査の経過

昭和56年７月７日付深地第６４４号において埼玉県深谷土地改良事務所より、昭和56年度荒川左岸地区総合パイロット事業区域内の埋蔵文化財の取扱いについて協議書が提出された。これに対し、昭和56年７月16日付教文第434号において埼玉県教育委員会より、発掘調査を実施する旨回答がなされた。

これを受けて熊谷市教育委員会では、調査を実施することになったが、本事業に伴う発掘調査は七ヵ年計画で実施されており、本年はその五年目にあたる。調査は、国庫・県費補助金、農政負担金および市費をもって実施した。

発掘調査は、昭和56年９月７日に開始された。新設される小排水路をトレンチとして土層調査し、遺構の存在を確認すると共に、大排水路、道路のパイプ埋設溝、および面工事によって破壊される部分に所在する遺跡を対象に調査を実施した。その結果、遺跡地図にドットされている古墳（女塚古墳）は唯一基であったが、実は周辺に多数の古墳が存在すると判明した。地図上の古墳を女塚１号墳とし、新たに発見された古墳を各々、女塚２号墳～５号墳とした。面工事によって削られる１号墳、水路新設部に位置する２・３号墳、道路新設部に位置する４号墳を対象として調査は進められた。その他古墳群の周辺部には集落遺跡が確認されているが、埋設位置が深く、水路部分の調査のみに留まった。

女塚古墳はすでに墳丘は削りとられており、その存在を確認することから始められた。存在確認の為東西方向に設定されたトレンチは、１号墳後円部の南半から前方部周溝を経て２号墳に達した。断面では、最東部に埴輪をもった部分→周溝→東・西両面に埴輪をもった部分→周溝→埴輪を東にもった丘→周溝→東西両面に埴輪をもった部分→周溝と連続した為に、当初は４基の古墳が密集するのかと当惑したが、付設されたトレンチによって１号墳の周溝外堤に埴輪列が存在することが確認され、実は２基であると判明したのである。この際、１号墳は帆立貝式の前方後円墳、２号墳は円墳であることも確認された。その後に発見された４号墳は、検出された埴輪に原位置をもつものが無い状況を示すレベルまで削平されていたが、墳央部に礫槨が検出され、大いに驚かせた。

このように進行した調査は、湧水と、湧水によって軟弱化した泥土で容易なものでなかった。その為に調査期間も長いものとなってしまった。さらに、各古墳で遺物の出土量が多く、これに拍車をかけたことになった。

女塚１号墳は二重の周溝をもつ帆立貝式の古墳であり、前方部に形象埴輪、後円部および周溝外堤に円筒埴輪列を有する古墳であること、先年調査された本墳の東200m に位置する鎧塚古墳とほぼ同年代に構築されたこと、２号墳においては、一周する円筒埴輪列と北面に集中して形象埴輪が検出されたこと、４号墳では、当地域では半ばあきらめられていた主体部が検出されたこと等、中条古墳群を解明するうえに重要な、多くの成果をあげ、本発掘調査は、昭和57年１月30日終了した。

Ⅱ．周辺の環境

熊谷市上中条一帯は、利根川の南方約３km、荒川の北方約4.5kmのところにあり、荒川の沖積扇状地の北端に位置している。標高は約24m で、大部分が水田であり、両河川の濫流によって形成された自然堤防が発達している。

中条古墳群から東の利根川南岸には、南河原村から行田市にかけて、酒巻・斉条古墳群、行田市須加・新郷に新郷古墳群が所在する。行田市内を武蔵水路に沿って南下すると、小見古墳群、若小玉古墳群、さらに南下すると、稲荷山古墳、丸墓山古墳、将軍山古墳、瓦塚古墳等の埼玉古墳群が所在する。これら古墳群の南および西域は、扇状末端地であり、水を得やすく、古代から生産活動―水田耕作―の適地である。当地域には弥生時代中期～古墳時代にかけて、池上遺跡、池守遺跡、皿尾遺跡、東沢遺跡、中島遺跡等の集落・生産遺跡が所在している。

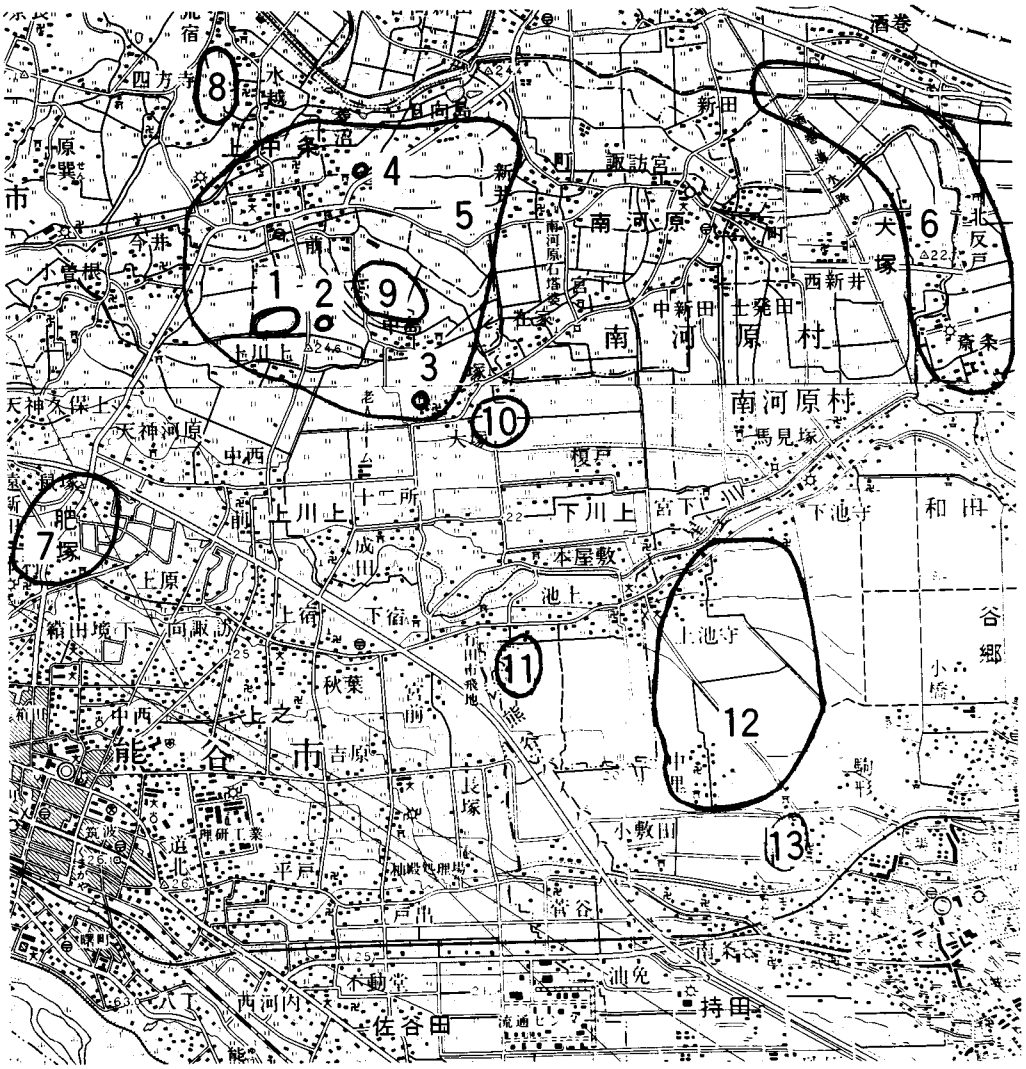


Fig. 1

遺跡分布図

1．女塚1～5号墳
2．鎧塚古墳
3．大塚古墳
4．権現山古墳
5．中条古墳群
6．斉条酒巻古墳群
7．肥塚古墳群
8．光屋敷遺跡
9．中島遺跡
10．東沢遺跡
11．池上遺跡
12．池守遺跡
13．皿尾遺跡

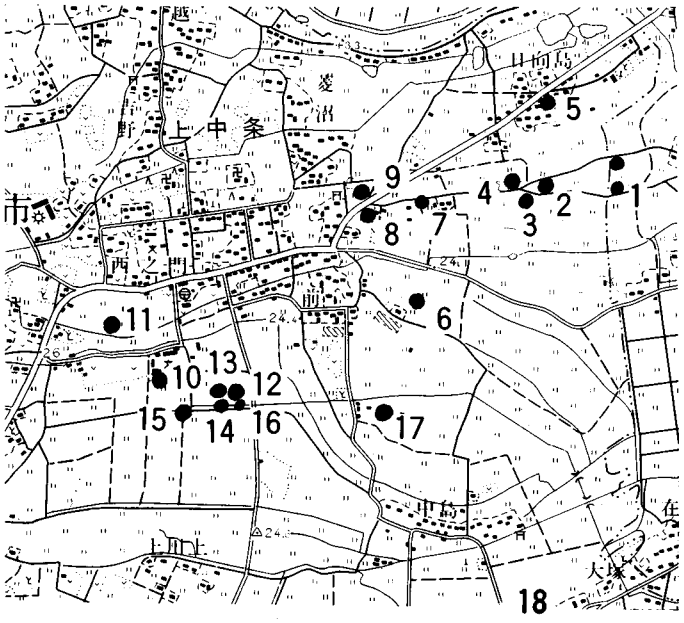


Fig. 2　中条古墳群分布図

Ⅲ．中条古墳群

熊谷市大字上中条、今井，大塚一帯の自然堤防上に立地する。現在は大部分水田、一部宅地となっており、大塚古墳の他は全て墳丘が削平されている。明治時代頃まで墳丘が残存し、名称の付されているものは14基であるが、本来はこの数倍に及ぶ数の古墳が存在していたものと思われる。古墳群が立地する自然堤防は、東西方向を基軸としており、三群に分離している。古墳群はこれによって、北辺を東西に分布する上中条支群、中央部を北西から南東へ横切る今井支群、南辺に位置する大塚支群に区分される。

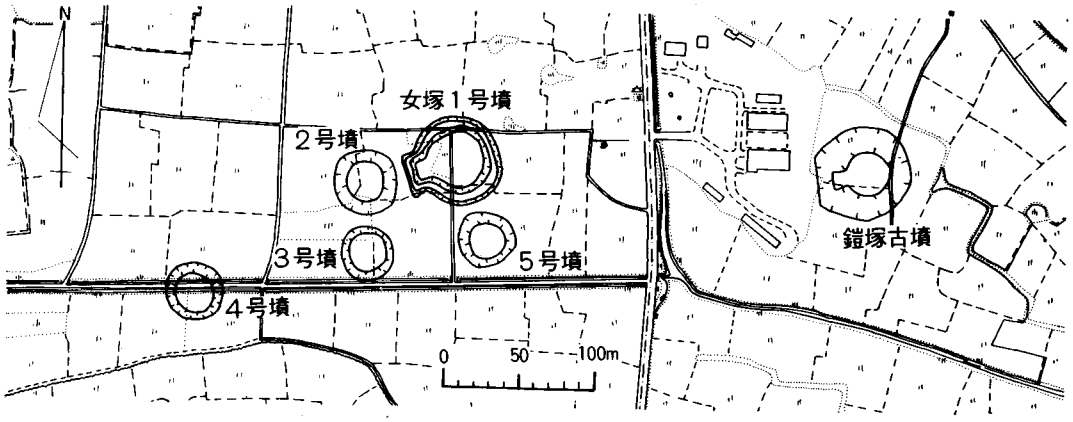


Fig. 3
今井支群分布図

上中条支群は、東京国立博物館に所蔵されている武人埴輪、馬形埴輪等が出土した鹿那祇東古墳（1）を東端に、鹿那祇西古墳（2）、雷電塚古墳（3）、屯倉塚古墳（4）、団扇塚古墳（5）、鍋塚古墳（6）、行人塚古墳（7）、稚児塚古墳（8）、権現山古墳（9）その他無名の古墳が存在する。今井支群（第3図）は、丸塚古墳(10)、聖天塚古墳（11）、女塚1号墳（12）、女塚2号墳（13）、女塚3号墳（14）、女塚4号墳（15）、女塚5号墳（16）、鎧塚古墳（17）等の古墳がみられる。大塚支群は、現在大塚古墳唯一基確認されているにすぎないが、大塚古墳の周辺地域から埴輪の出土が見られ、群を成していたものと考えられている（18）。このうち、発掘調査が実施された古墳は、上中条支群の権現山古墳、今井支群の女塚1号墳、女塚2号墳、女塚4号墳、鎧塚古墳、大塚支群の大塚古墳である。

a．権現山古墳

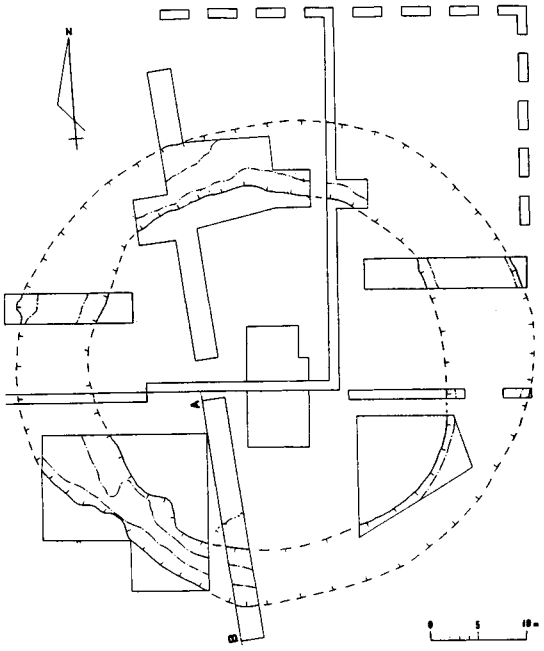


Fig. 4 権現山古墳平面図

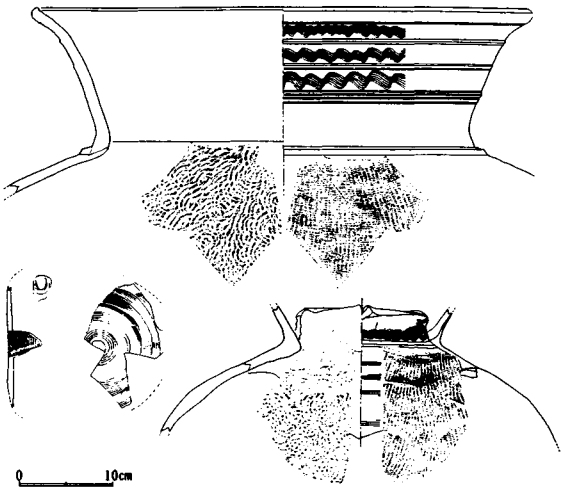


Fig. 5 権現山古墳出土遺物実測図

南北37.6m、東西36.9m を計る円墳である。墳丘は大部分削平され、周溝底より 130㎝上面までが残存していたにすぎない。

主体部は不明であるが、墳央南部に、南北 4.4m、東西 3.3m 範囲で長方形を呈する礫群が検出されている。この礫群はその周辺部に礫が集中し、中央部が閑散とした状態である。また、礫は南北 6.7m、東西 5.6m の範囲に拡散している。

周溝は一周し、 4.3～ 9.5m の幅をもつ。立上りは内外面共なだらかである。

遺物は、北面の墳丘裾部から周溝にかけて須恵器の大甕、甕、提瓶が出土している。埴輪の出土は皆無である。

本墳は出土土器から 7 世紀前半に比定されている。

b．鎧塚古墳

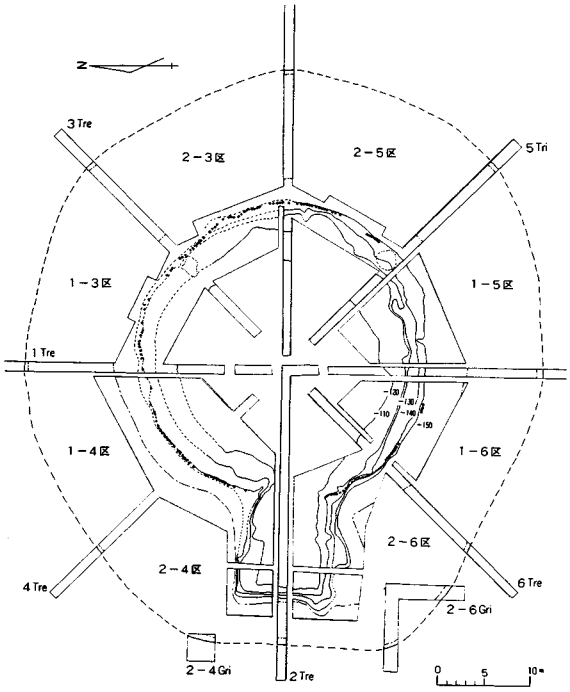


Fig. 6　鎧塚古墳平面図

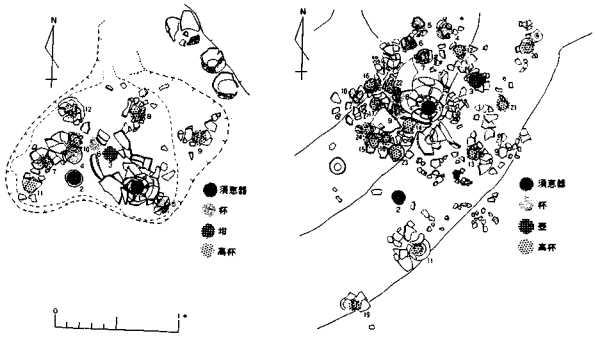


Fig. 7　鎧塚古墳墓前祭祀址平面図

全長43.8m、後円径31.8m、前方長12m、前方幅12.5m、くびれ幅 7 m を測る、帆立貝式の前方後円墳である。主軸方位はN－90°－Wを示す。墳丘は戦前に削平されており見ることはできないが、古老の話によると、後円部 4 m、前方部 1 m ほどの高さをもっていたという。

周溝は全周する。後円側12.5～14.2m、前方前面 4.8 m の幅をもち、前方前面が直線となる。変形の卵形を呈する。立上りは、墳丘側では比較的緩やかであるが、外側は急である。周溝を加えた全体規模は、主軸長61.2m、後円最大幅55.1m、前方直線部幅19.0m を測る。

後円部墳端の傾斜角度変換線上には、朝顔形埴輪を含む円筒埴輪列が、 2 m あたり 7 本の割合で囲繞している。前方部では、配置された状態では検出されていないが、周溝内から多量に出土しており、後円部より一段高い位置に配置されていたものと考えられている。形象埴輪も少量出土しているが、それらは全て、人物を形象しているものである。そのうちの一例は、一対となるものが後円の北と南に分離しており、後円墳頂部に樹立されていたと考えられる。

後円部墳丘裾、円筒埴輪列の内側には、二ヵ所に墓前祭祀址と考えられる，土器集中地域が検出されている。後円部中心から北東隅に当る。両者には、構成する土器群に時期差が認められ、前者を 1 次、後者を 2 次とすることができる。両者は共に、須恵器高杯型器台を中心にして、その周囲をとり囲むよう

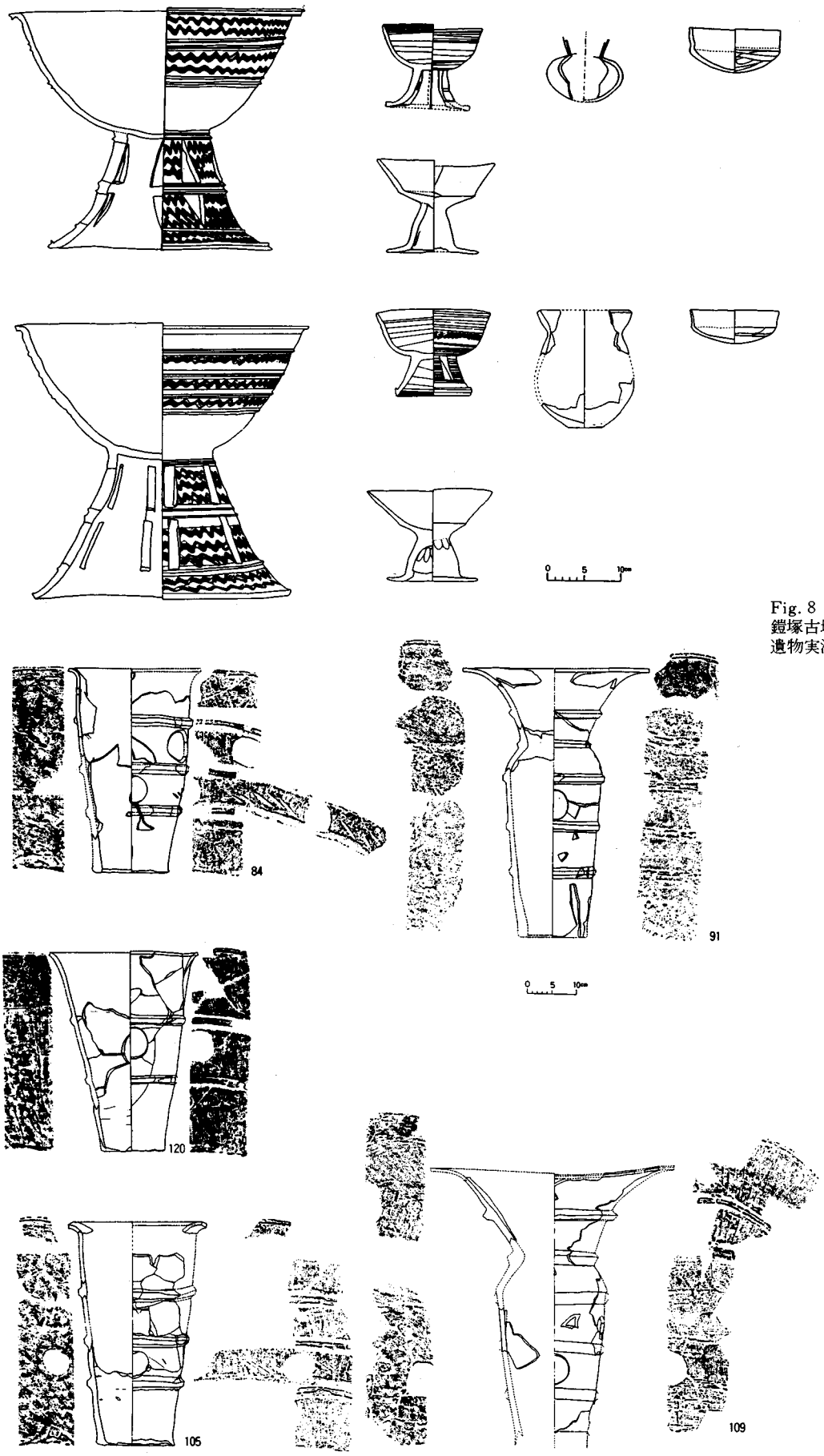


Fig. 8
鍋塚古墳出土
遺物実測図

に、須恵器高杯、土師器壺（坩）、土師器高杯（内一は大型）、土師器杯を配置している。器種の構成は一致しているものの、数量（土師器高杯・杯）においては、２次例が１次例の倍を数える。また、１次例は土拡状の設地場をもつのに対して、２次例は、墳丘傾斜上にそのまま設置されるという差異もみられる。

周溝の覆土には三層のテフラが検出されている。上位二層は、浅間ＡおよびＢであり、下位層は、榛名火山二ッ岳の、いわゆる、ＦＡ層である。ＦＡ層は、周溝底一層、もしくは、二層上位に位置し、周溝築成後ある程度時間を経て堆積したものとすることができる。

主体部はすでに削平されており、存在しないが、拳大の礫が多量に出土したということであり、礫槨を有していた可能性が高い。

墓前祭祀遺物、埴輪等、発掘調査によって出土した遺物の他、主体部からの出土品として、鏡、玉類などが伝えられている。

出土遺物、あるいは、周溝堆積火山灰等によって本墳は、５世紀末～６世紀初頭に位置づけられる。

ｃ．大塚古墳

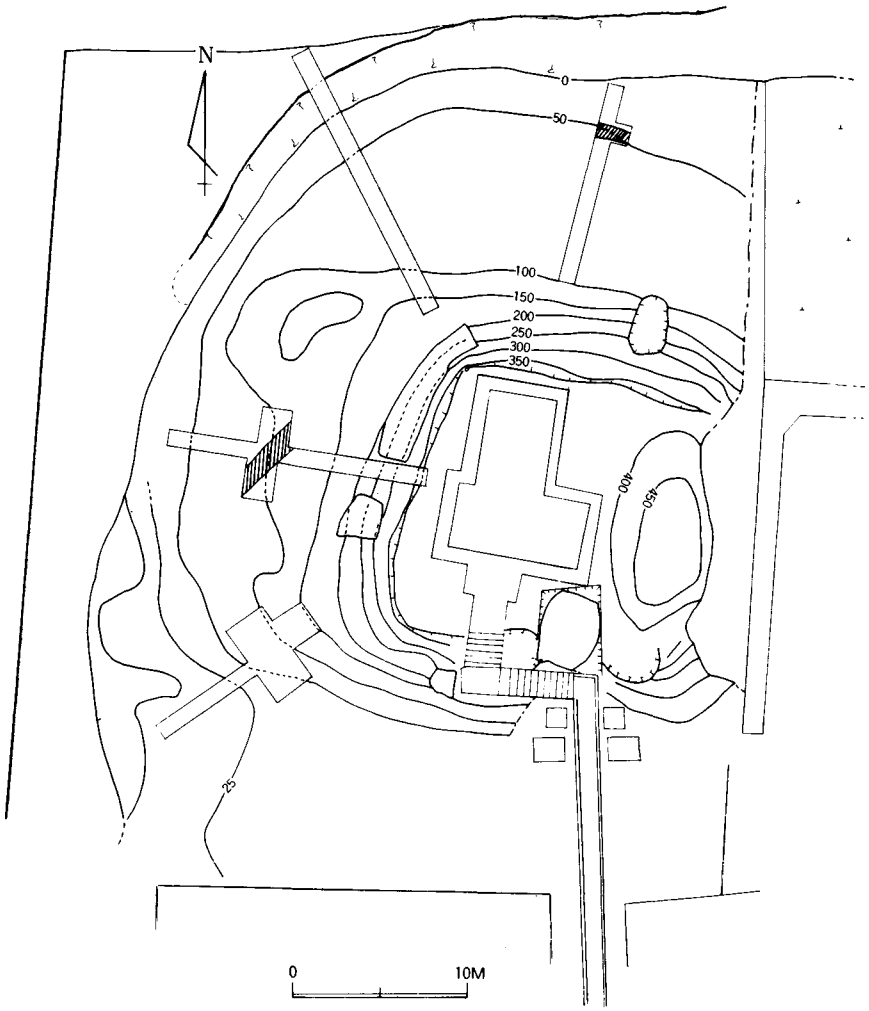


Fig. 9　大塚古墳墳丘平面図

墳丘は、東を寺域によって、南を神社の境内として遊園地化され、それぞれ削平されているものの、直径24m、高さ3.5 mの規模で残存している。この残存状況によって、従来は直径30 m前後、高さ４m程の円墳として、市指定となっている。７世紀半に比定されている。

発掘調査の結果、墳丘は約35 mになることが確認された。この墳丘は、高さ1.2m の基壇上に築かれていることも判明し、全体規模は、直径約59m を測ると推定されるに至った。

北および西の基壇の外形は、円形を呈しており、その外周には農業用水路が周るが、基壇を構成している土層が傾斜をもって終了する地点であり、現形をもって原形を推測することが可能であると考えている。

周溝の有無については、調査がはなはだ不足しており、不明であると言わざるを得ない。

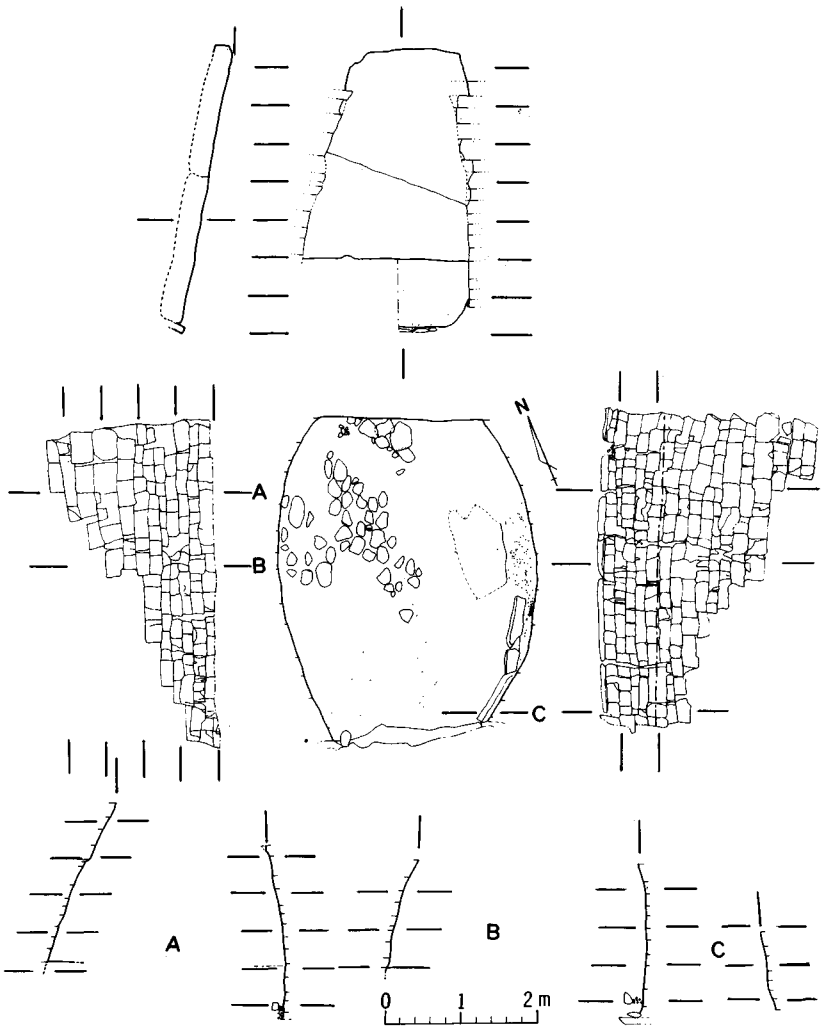


Fig.10 大塚古墳石室実測図

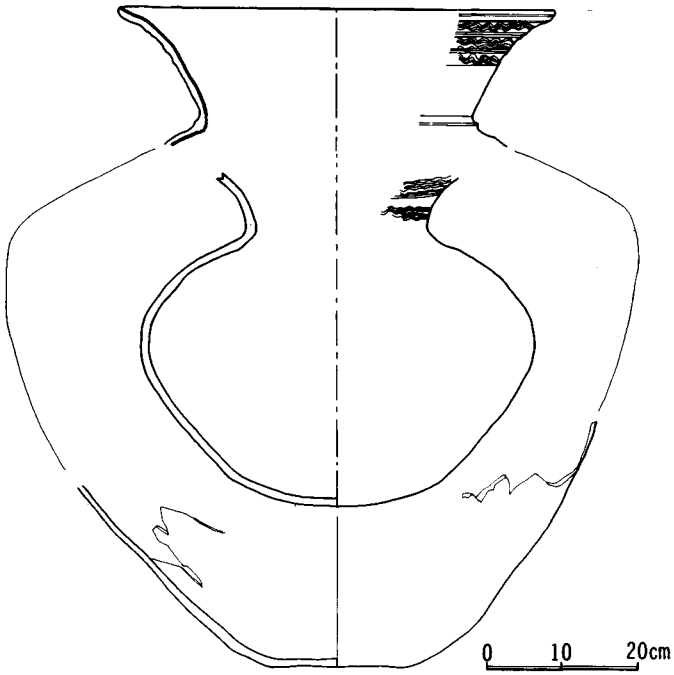


Fig.11 大塚古墳出土遺物実測図

天井石の一部が露出していた主体部は、やや西に振れた南に開口し、長さ4.2m、奥壁部の高さ2.75m、奥壁幅2.3m、胴部最大幅はほぼ中央にあって3.4m、前面幅2.1m を測る、胴張り型の横穴式石室である。

奥壁は、高さ3.7m、厚さ約30cmの緑泥片岩の巨岩が用いられており、内に約10度傾斜して立てられている。天井石は、緑泥片岩二石で構成され、内一石が残存している。側壁は、高さ幅15cm～高さ30cm、幅40・50cmの浮石質角閃石安山岩切石が布積み、一部切組積みがなされている。側壁は、奥壁部の残存状況が良く、床面上15段、床面下５段、計20段まで確認されており、持ち送り状を呈している。天井幅は、奥壁部で約80cmを測る。側壁は二・三石に連続したノミ痕が見られ、組み合わせた後に調整していたことが知れる。

床面は拳大の礫が全面に敷かれているが、奥壁寄りの部分には、人頭大の礫が集中するところもある。

床面下は約１ｍの高さで版築されており、床面下に積まれている側壁と接する部分には、緑泥片岩の板石が立てられたり、人頭大の礫がつめこまれており、石室の内面からも補強されている。壁は、奥壁が側壁より約20cm下位に設置されているが、両壁とも、緑泥片岩の板石、あるいは、礫が敷かれ、沈降を防いでいる。

側壁の最前部は、鍵形に切り込まれ、門が設置されていたものと思われる。

石室の前面は、30cm下位に礫が敷きつめられた面をもち、両側に拡大する状況である。このことから、本墳の主体部は複室構造をもつと考えられるが、詳細は定でない。

石室内から小札、鉄鏃、銅製柄、銅製鞘尻金具、金箔、鉄釘等が、基壇上からは、墳丘の西で、幅50cm前後の浅い溝の中から並置された状況で、須恵器大甕、甕が出土した。

Ⅲ．古墳の調査

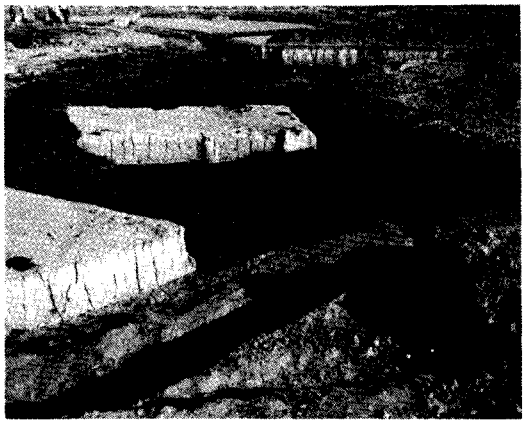
a．女塚１号墳

中条古墳群の中央部に位置する今井支群は、その北西部から東部にかけて、弓状に分布する。本墳は遺跡地図上には、女塚古墳として記されているものである。東 200m に鎧塚古墳、西に女塚２号墳、南に女塚５号墳、南西に女塚３号墳の三基が、それぞれ、近接している。

墳丘の大部分が削平されており、水田となっている。後円部の西半に当る地域は、近年まで、農耕馬の骨等の捨て場所として利用されていた。削平は概、墳丘部周辺のテラスの上面で止められているが、その後の耕作の深浅によって、埴輪列の残存する部分とそうでない部分が生じている。

PL. 1　女塚１号墳前方部

PL. 2　女塚１号墳後円部



a

b

c

d

PL.3 周溝 a 前方部南 b くびれ部南 c くびれ部北 d 後円部南

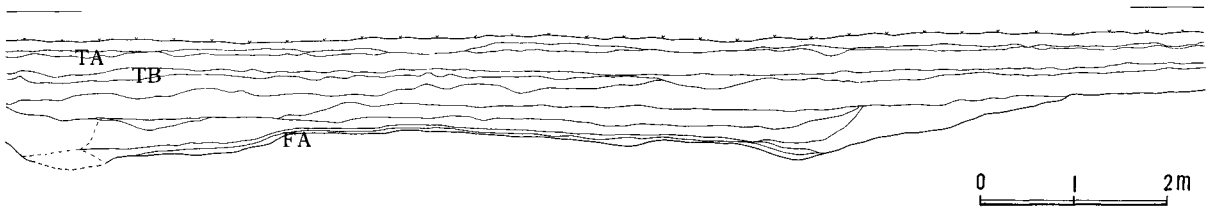


Fig.12 女塚1号墳土層図

長軸46.0m、後円部径36.8m、前方部長 9.2m、前方部前面幅18.4m、くびれ部幅13.6m を測り、前方部が短く、前面が開く形態を示す、帆立貝式の前方後円墳である。墳丘の高さについては不明である。

後円部は、南側では2～2.5m、北側で3～6m幅のテラスをもつ。このテラスは、後円部では全面に周るが、くびれ部に移行する手前で途切れ、前方部には連続しない。前方部には、テラスはみられない。後円部のテラス先端部、周溝への角度変換面には、朝顔形円筒埴輪を含む円筒埴輪が樹立されている。

周溝および、周溝外に堆積している、浅間A火山灰層は、墳丘部には認められず、同層堆積後に墳丘が削られたことを示す。基盤となる土層は、①白色粘土と青色粘土の混在層、②灰褐色粘土と青色粘土の混在層、③青灰色粘土層、④青色粘土層である。最下位層は④であり、順次③、②、①と移行する。墳丘周囲のテラス面基盤層は、①あるいは②であり、中堤帯および外堤帯は③、周溝底は④である。周溝覆土は、総体的に灰褐色粘土であるが、砂層が部分的に含有され、複雑な様相を呈している。周溝部には、浅間A火山灰の他、二層のテフラが堆積する。

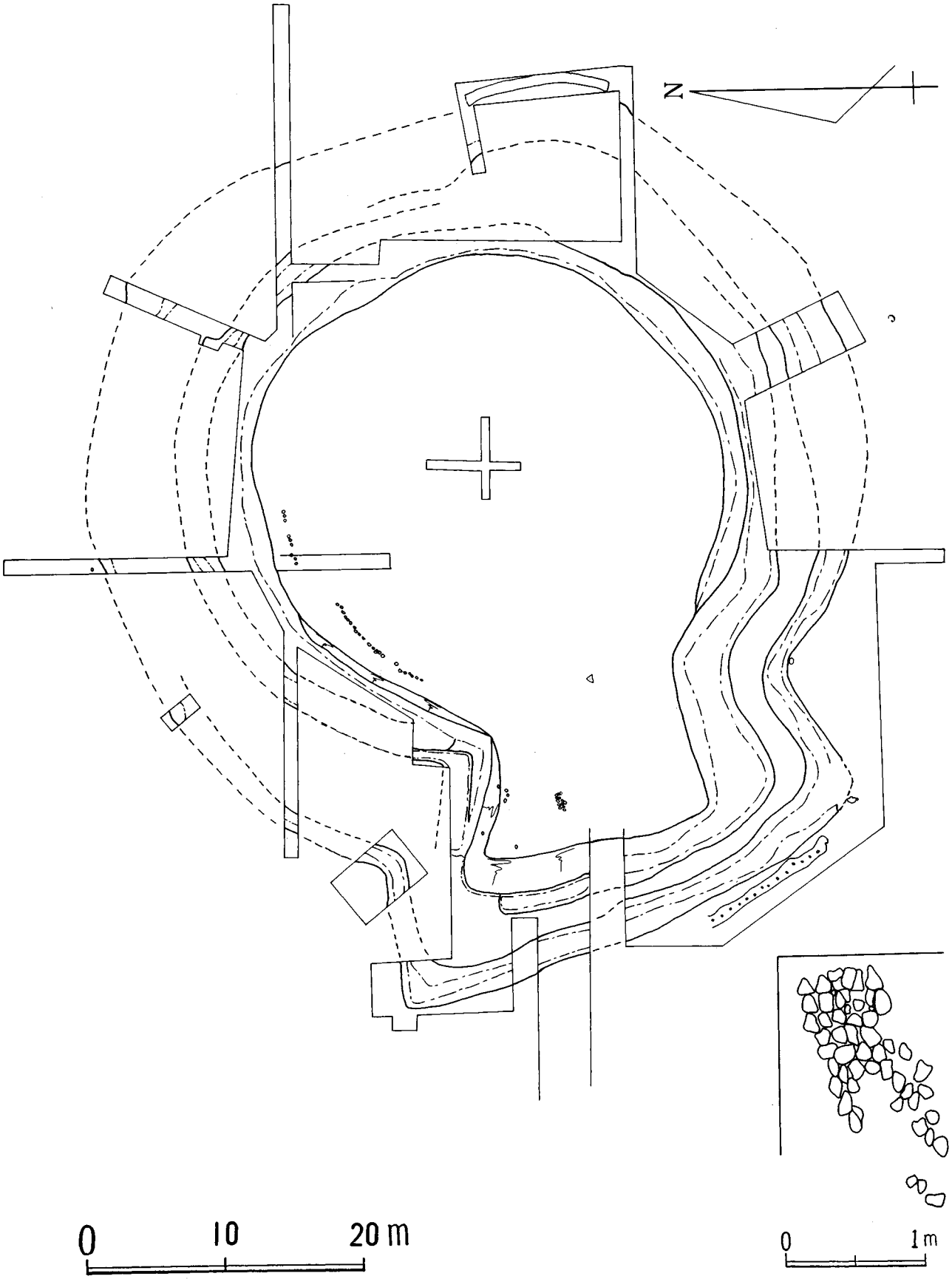
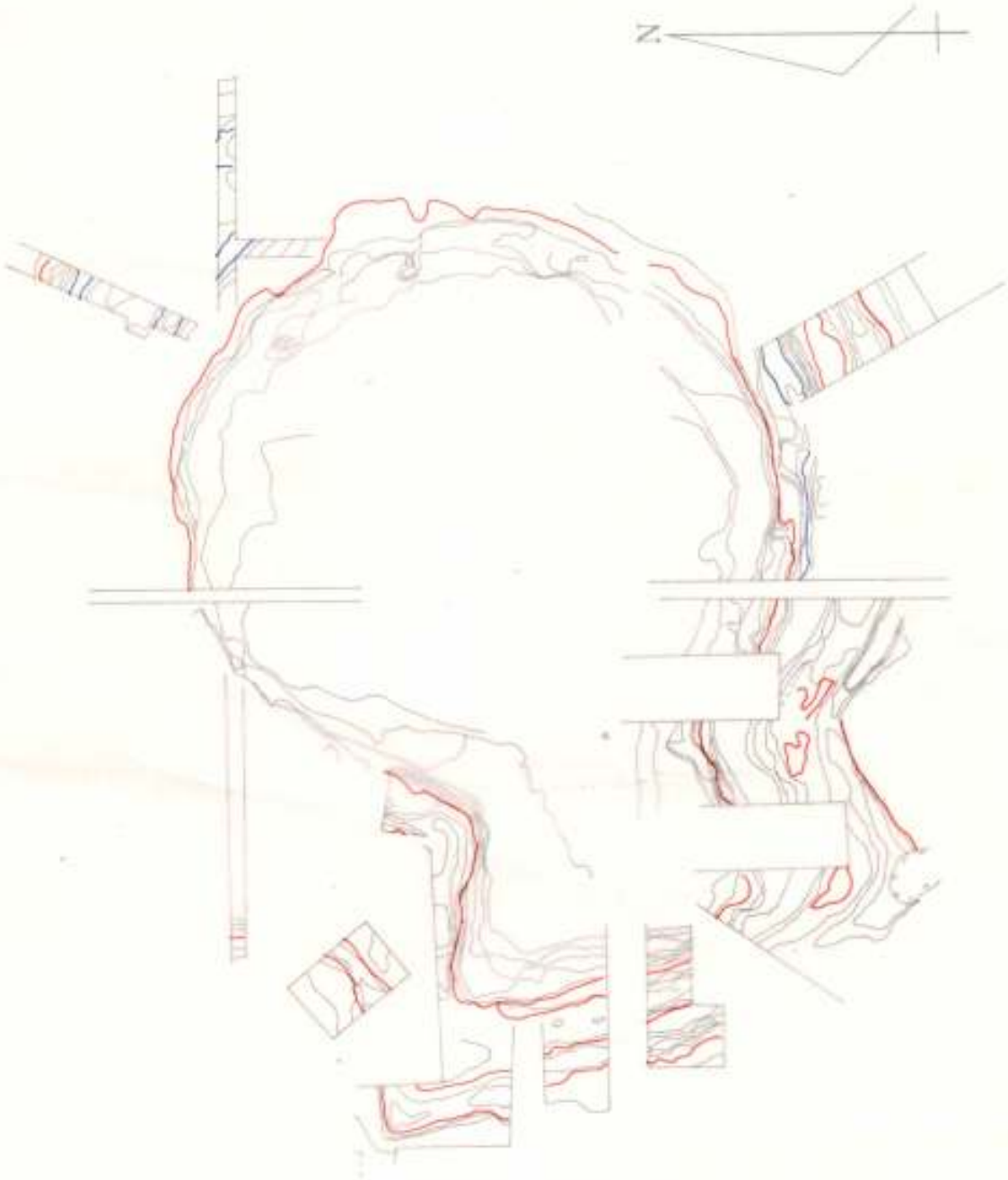


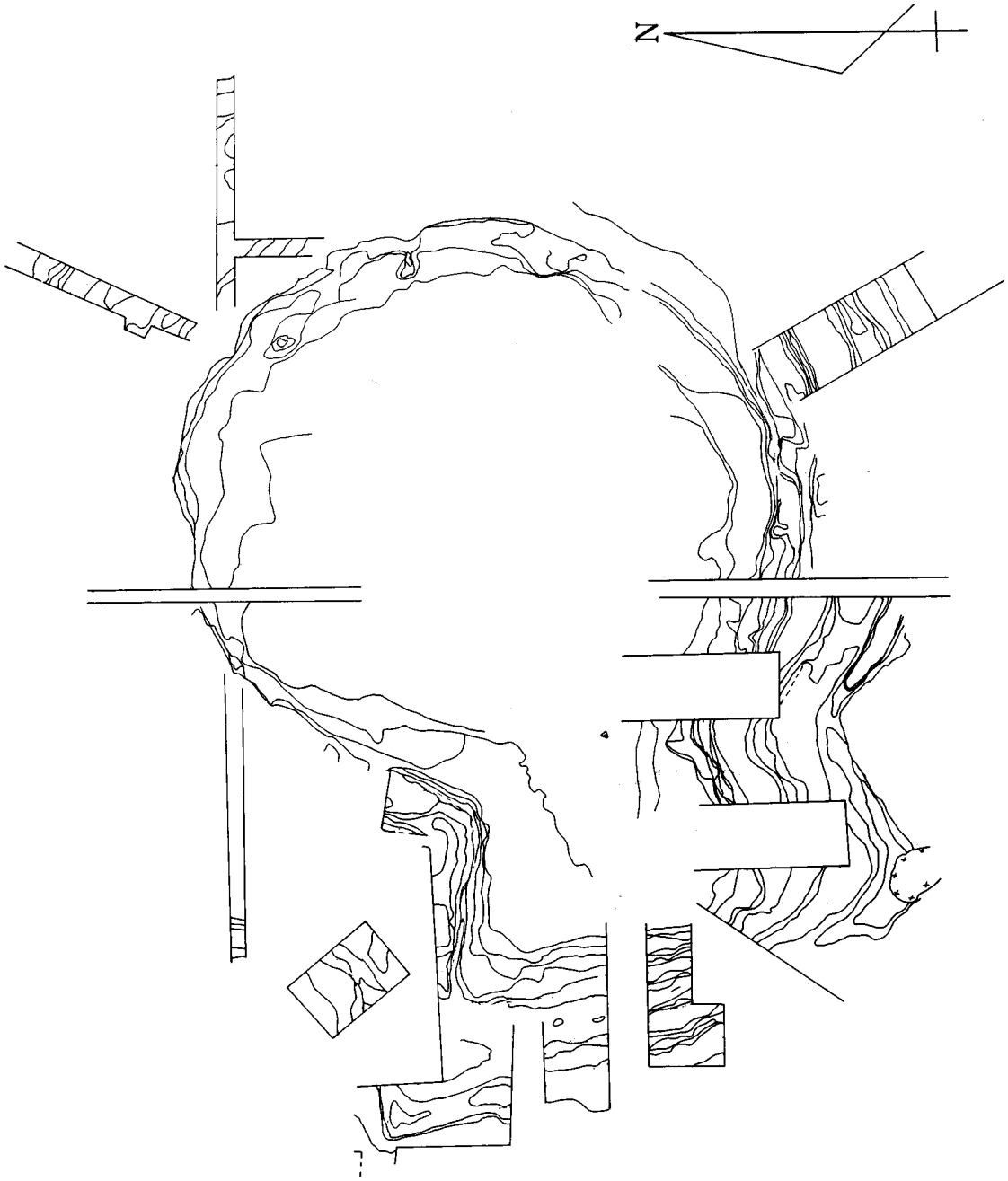
Fig.13—1　女塚1号墳平面図



赤線：標高23．5m、青線：標高23．0m

0　10　20m

Fig.13－2　女塚1号墳コンター図



赤線：標高23．5m、青線：標高23．0m

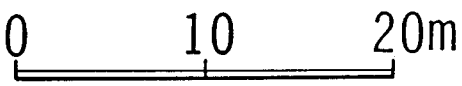
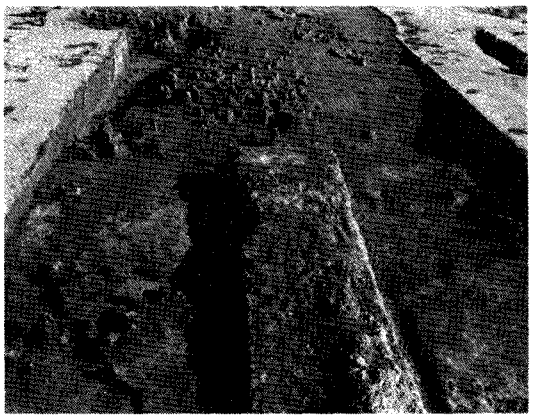


Fig.13—2　女塚1号墳コンター図

a



b

c

d

PL. 4　前方部　a　後円側より　b　周溝より　c・d　前方部石組

一は浅間B火山灰であり、一は榛名山二ッ岳火山灰、いわゆるFA火山灰である。浅間B火山灰は、周溝部から外部の全域に検出されているが、FAは、上面に泥炭層を載せて、溝底面および、中堤帯上に堆積するのみである。FA層は5cm前後の厚みである。また、FA層と溝底面との間には、部分的に粘土層・砂層を一・二層はさみ、古墳構築後時間を経て堆積したものであるといえる。

主体部については不明であるが、後円部中央付近には、拳大～長円形人頭大の礫が散在しており、石室の破壊された残がいであろうと思われる。

一方、前方部には、その中央北寄りに、墳丘の主軸方位N―103度―Wと一致した方向に長軸をもつ、長方形の石組みが検出されている。長軸1.2m、短軸0.65mで、10×15cm大の河原石が敷きつめてある。西側に崩れた礫が散在しているところから、竪穴状の石室床面であったと考えられる。なお、ここからの出土遺物は無い。

前方部は斜面途中で削平されており、平担面は残存していない。斜面の傾斜は、前面側では緩やかであるが、側面では急である。

周溝は、墳丘と相似形を呈し、二重に周る。二重の周溝は、いづれも後円部側で幅を広げており、墳丘から外堤までの幅も、当然後円部側で広くなる。周溝を含めた全体の規模は、長軸62m、後円部径55.5m、前方部長9.8m、前方部前面幅36.5m、くびれ部幅33mを測る。後円部テラス面からの深さは約1.30m平均を計る。

中堤帯は、1～2m幅をもつが、北面では、4m前後と太くなり、外溝への落ち込みがなだらかになり、かつ低くなる。南面では明瞭であり、周溝底から70～80cmの高さをもち、外堤帯と同じレベルを示す。

a

d

b

PL 5　遺物出土状況

a．前方部

b．後円部東

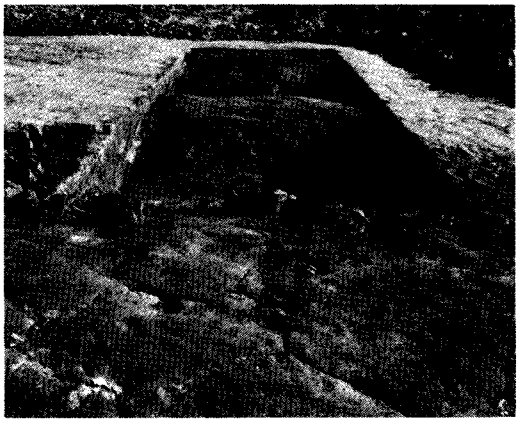
c．後円部北西

d．前方部

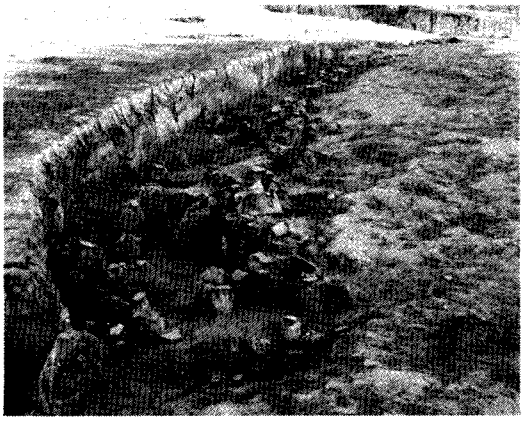
e．後円部南

f．後円部北西

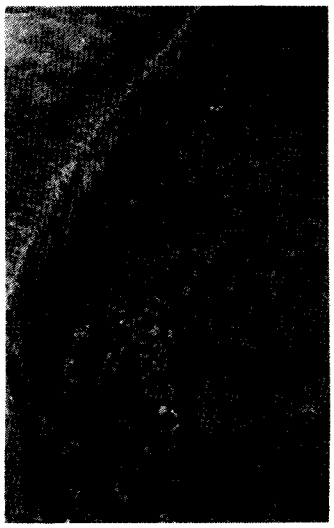
g．後円部北西



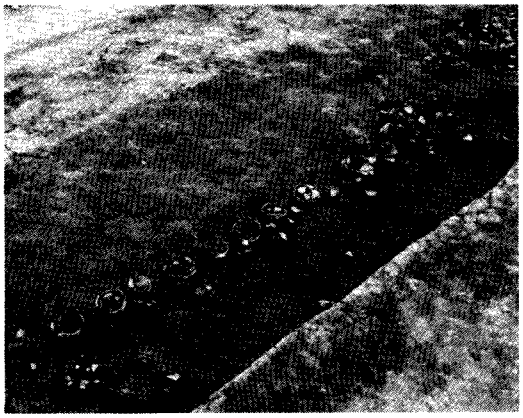
e



f



c



g

PL.6　後円部墳丘裾

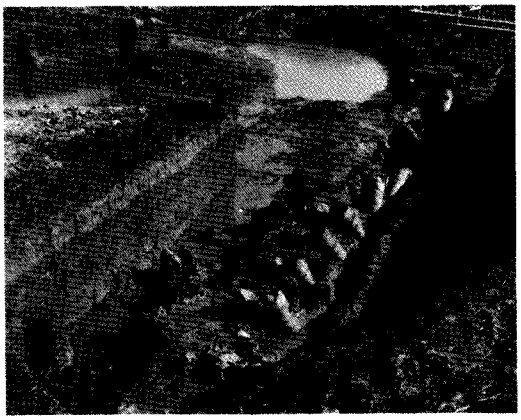
埴輪の出土状況は、後円部と前方部で異る。後円部テラス上に設置された埴輪は、大部分が朝顔形埴輪を含む円筒埴輪である。残存状況の良好な北西部では、2mの間に7本、15cm間隔で設置されている。北中央部の内溝からは、人物埴輪の頭部が出土しているが、後円部側の形象埴輪の出土は、この一例のみである。なお、円筒埴輪は、浅い溝に設置されたようである。

一方、前方部では、北辺の全面と、南辺のくびれ部寄りの部分から、形象埴輪が集中して出土している。北辺側は、その樹立されていた位置から周溝内へ倒れかかった状況で、南辺側は周溝へ落ちかけた状況で、各々検出されている。北辺では武人埴輪が、南辺では鼓・琴等楽人に関する埴輪が集中している。

外堤帯では、前方部前面南半および、後円部東側南半に各々朝顔形を含む円筒埴輪が列を成して検出されている。各々の位置する周溝に沿って、前方部側は直線上に、後円部側は弧を描いて掘られた溝の中に樹立されていた。両者共、五本に一本の割で朝顔形埴輪を含む。この部分以外には樹立された状況で円筒埴輪は検出されていないが、外提上には埴輪が全面から出土しており、レベルの高低が多少見られる状態で、埴輪が全周していたものと思われる。

また、外堤上の前方部南隅には、外方を向いた状態で、盾を持つ武人埴輪が完型で検出されている。南くびれ部の外周溝内からも同型の埴輪が出土している。さらに、このような盾を持

a



b

c

PL.7　前方部前面外堤埴輪列

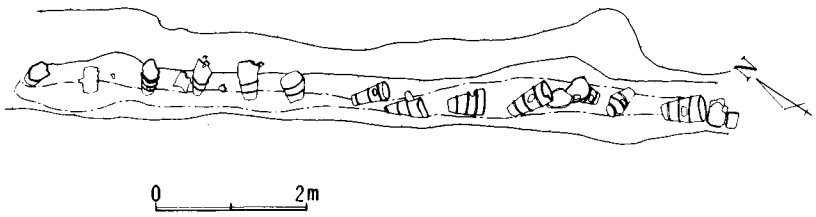


Fig.14　女塚1号墳前方部外堤埴輪出土状況平面図

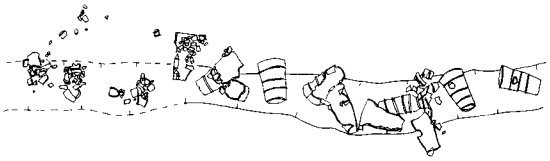
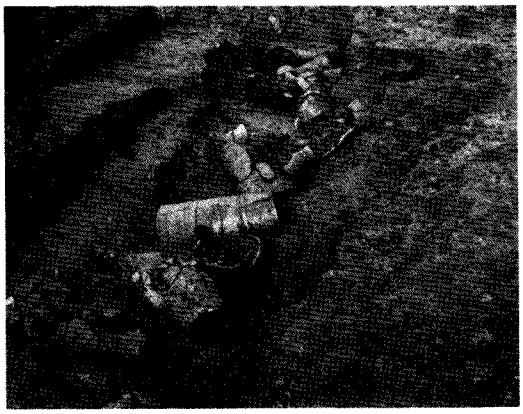


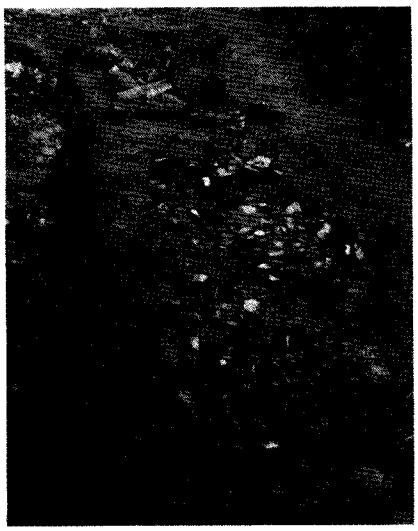
Fig.15 女塚１号墳後円部外堤埴輪列
出土状況平面図

PL. 8 後円部東外堤埴輪列



a

b



c

PL. 9 くびれ部北中堤
遺物出土状況

つ武人埴輪は、北くびれ部内周溝内でも出土しており、墳形の屈曲する位置に樹立させていたことがうかがえる。

土器類は、土師器高杯、坩等であるが、前方部南半および、北くびれ部の、いづれも中堤帯からの出土である。中堤帯以外では、くびれ部後円側のテラス上から、土師器高杯が一点検出されている。

出土した円筒埴輪は、器形、外面整形、透孔の穿ち方等によって２種類に大別される。上方があまり広がらず、円筒状を呈する形態は、凸帯が矩形をなし、外面整形は刷毛目を強く残す。部分的に横刷毛を施すものもある。内面整形は、横方向を主体とした刷毛目による。透孔はほぼ円形に穿たれる。上方が拡く形態は、凸帯が低く、とびださない。外面整形は、刷毛目の後縦のナデをくわえている。内面整形もナデによる。透孔は、上方中央が削り残されハート形を呈する。これらの特色は、朝顔形埴輪にも共通する。後者の基部は前者のそれより一段低くその分器高も低くなっている。前者の例は、前方部外堤埴輪列５、10、後円部外堤埴輪列Ａ、Ｅ、後者の例は前方部埴輪列11、12、13、である。(16・27図)

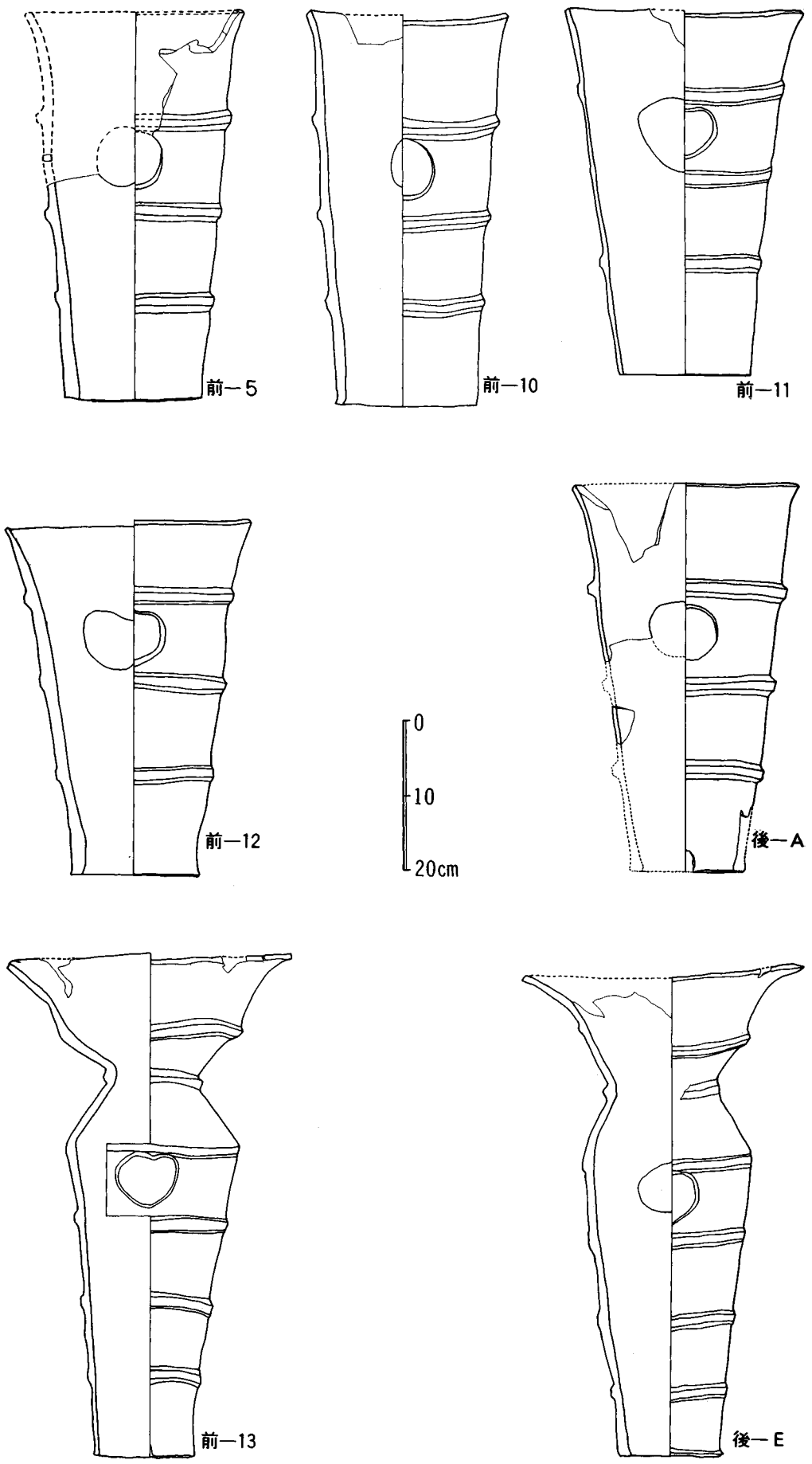


Fig.16
女塚1号墳出土遺物実測図
(1) 円筒埴輪

PL.10　女塚1号墳出土遺物1円筒埴輪

PL.11　女塚1号墳出土遺物2(盾を持つ武人、須恵器、土器)

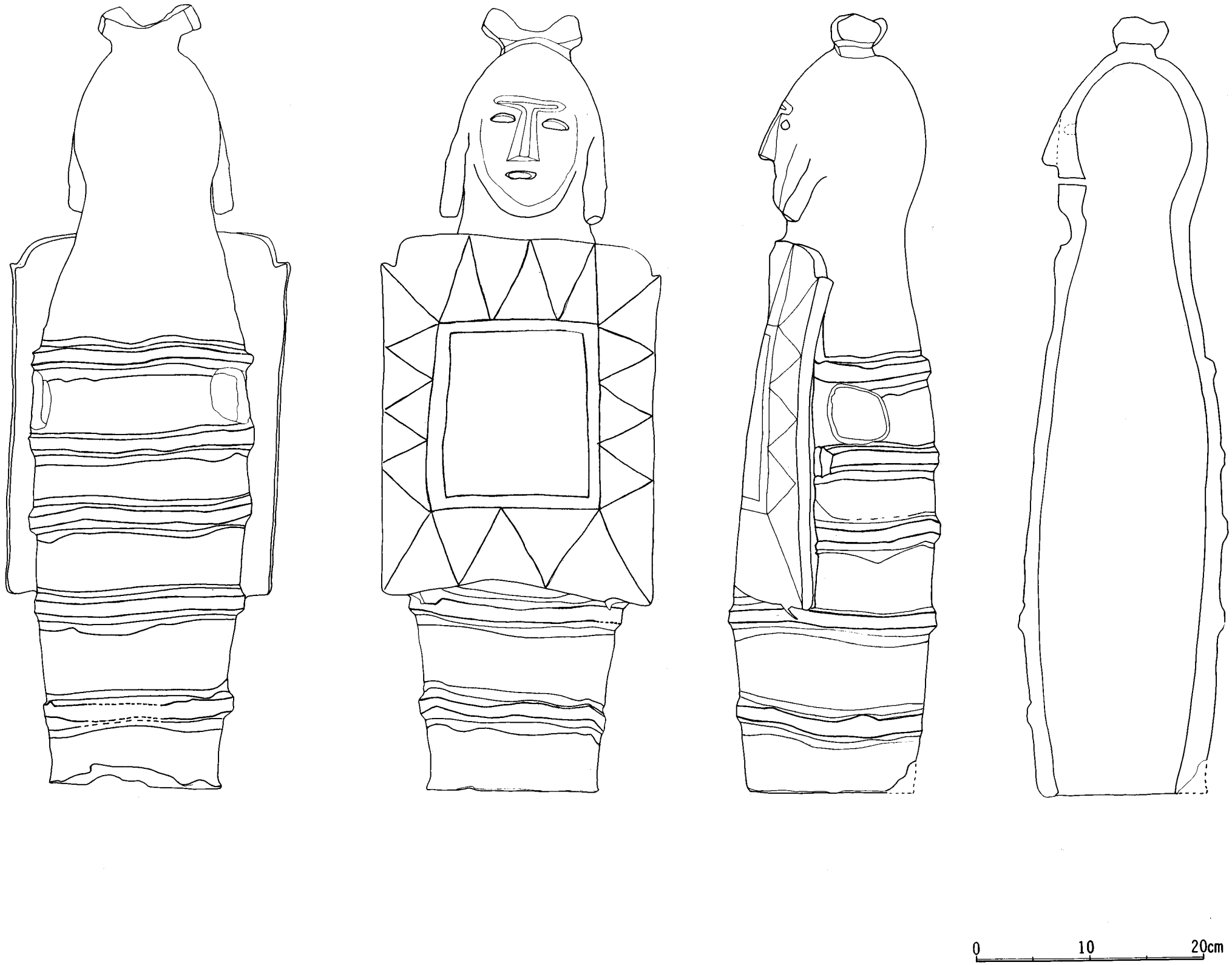
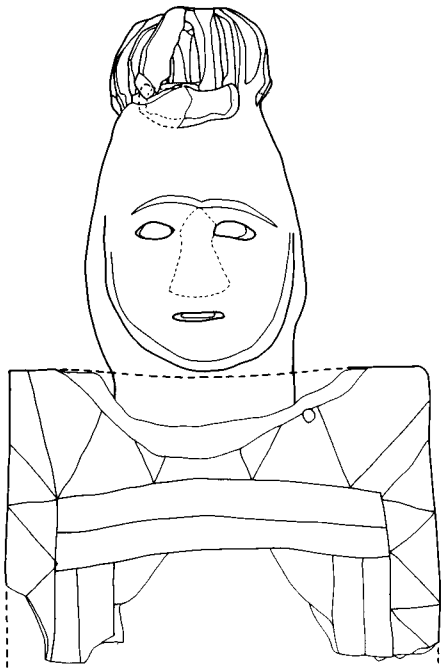


Fig.17 女塚1号墳出土遺物実測図(2) 盾を持つ武人



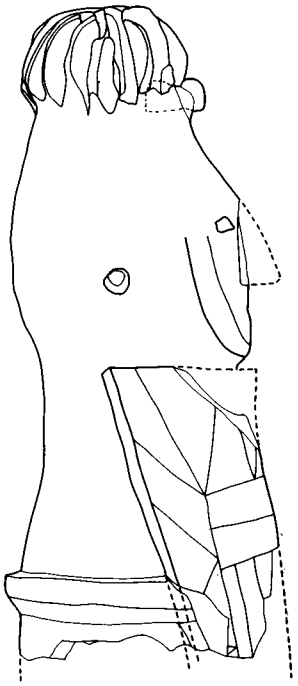
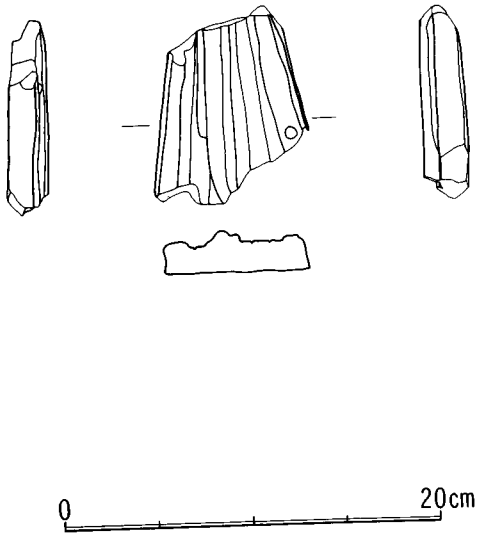
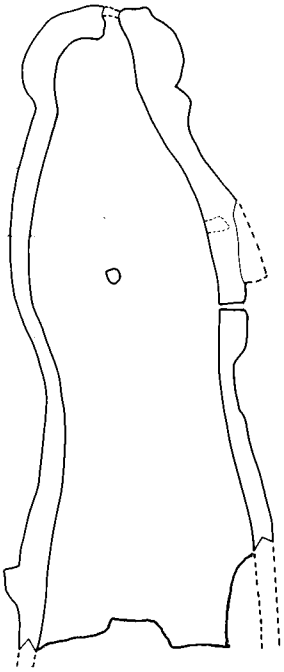
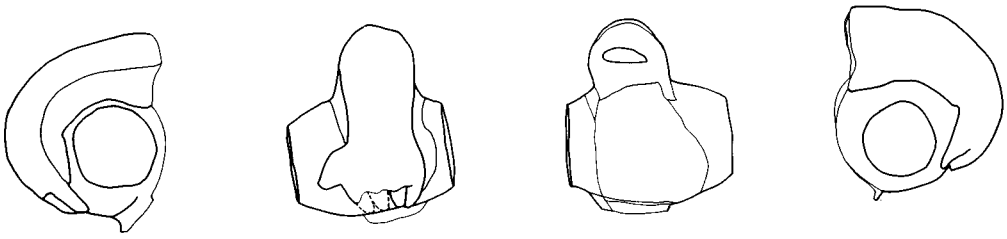
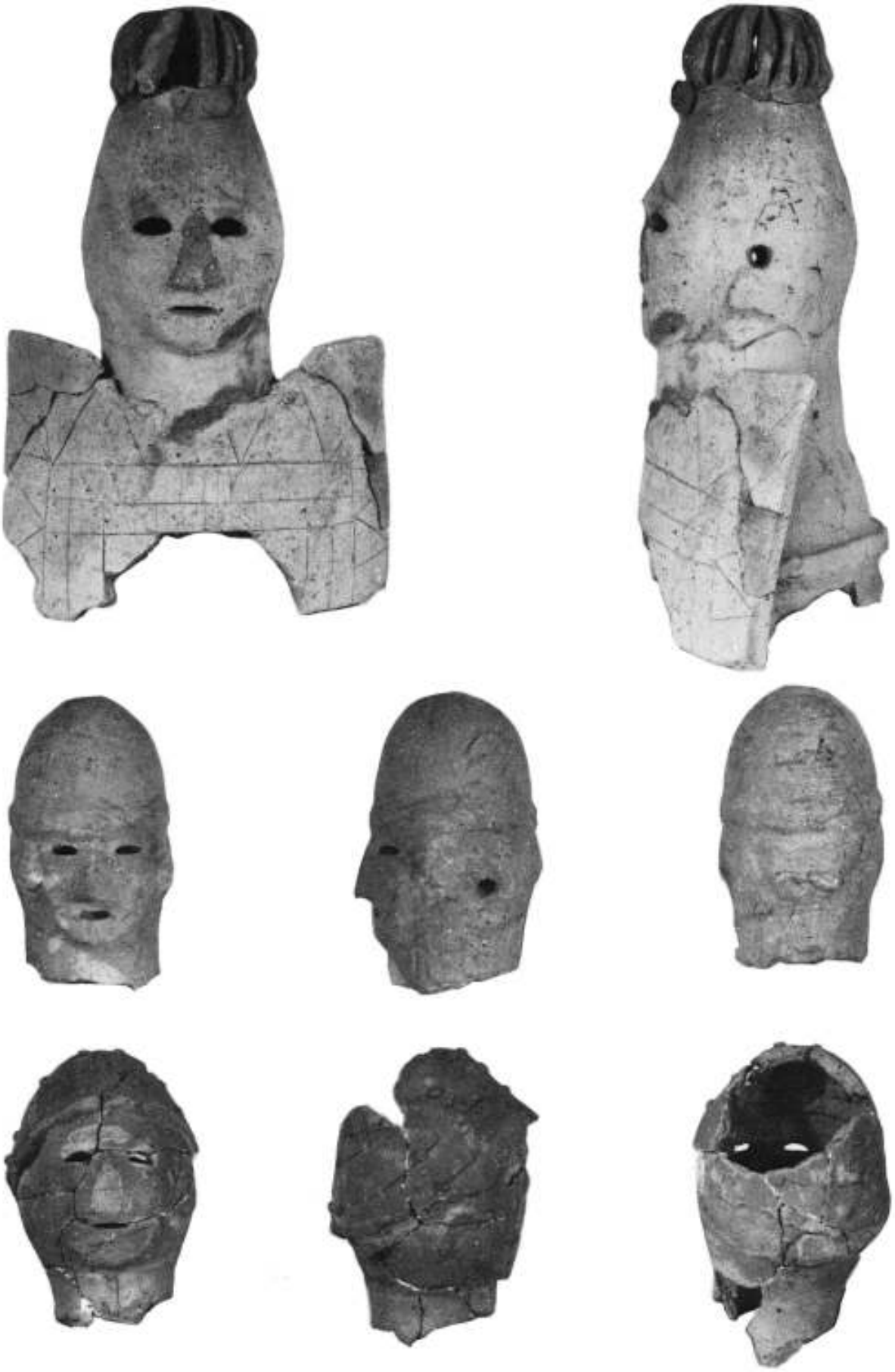


Fig.18
女塚１号墳
出土遺物実測
図（３）盾を
持つ武人、楽
器









PL. 12　女塚1号墳出土遺物3)　武人埴輪

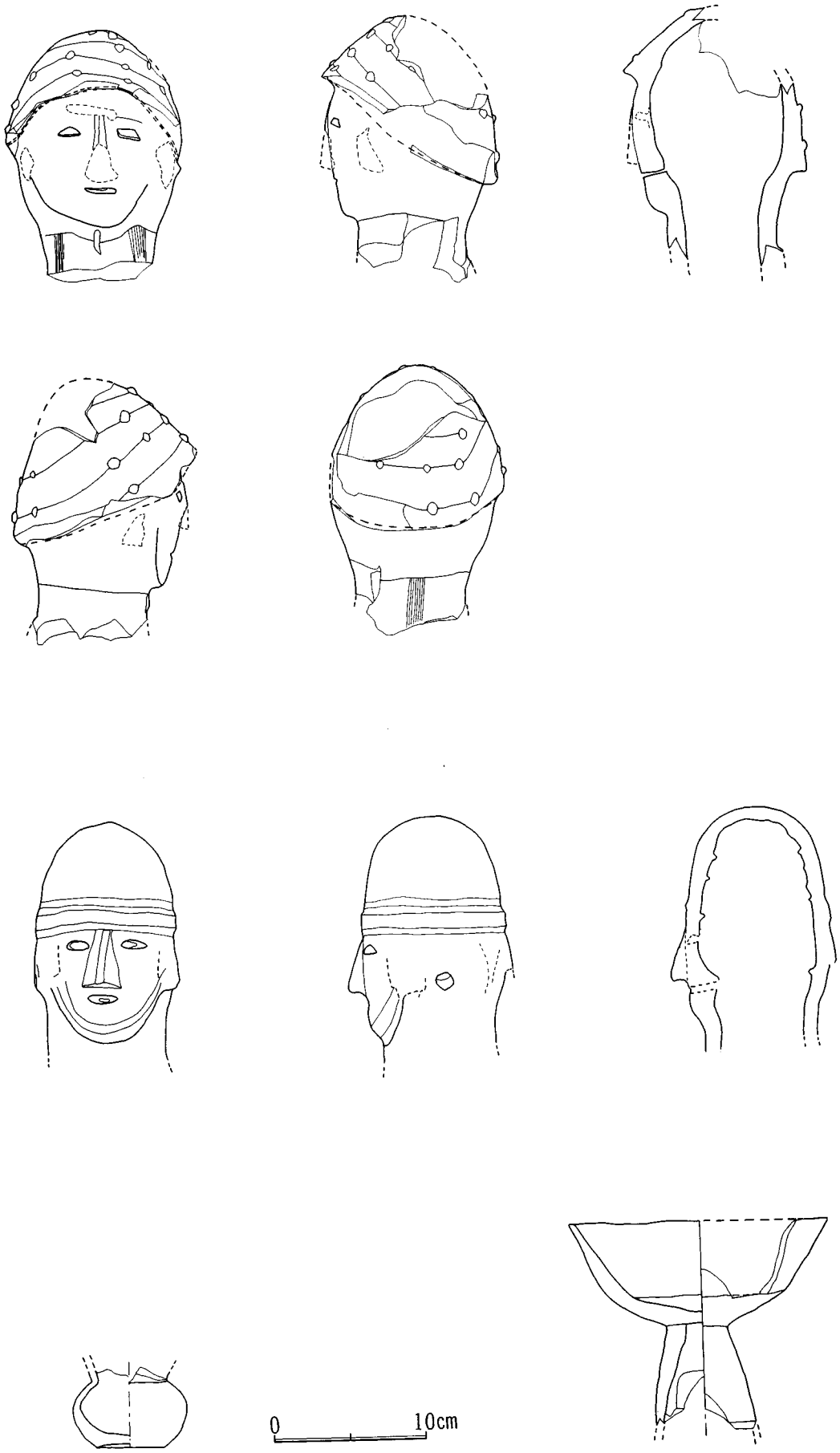


Fig.19
女塚1号墳出土遺物実測図
(4) 武人埴輪土器

b．女塚２号墳

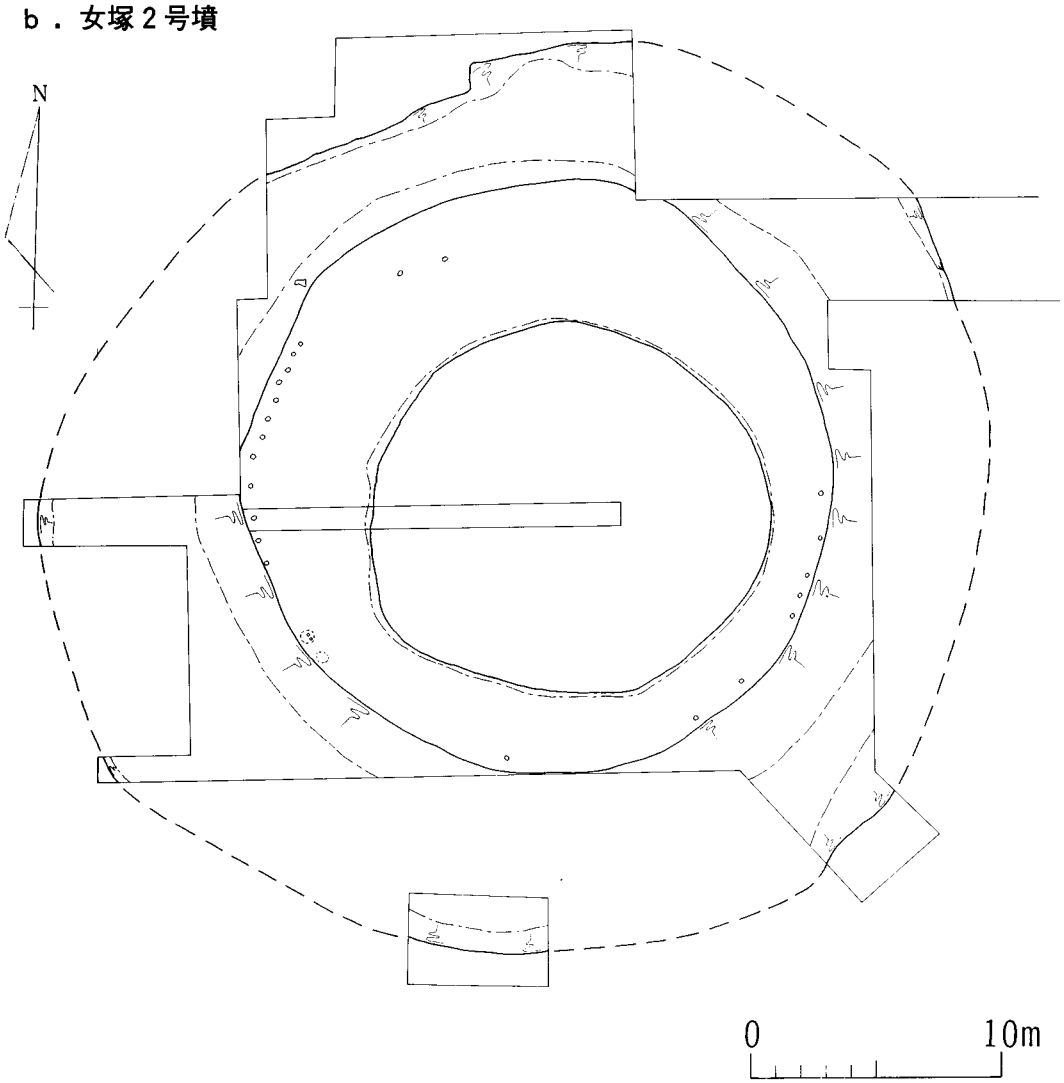
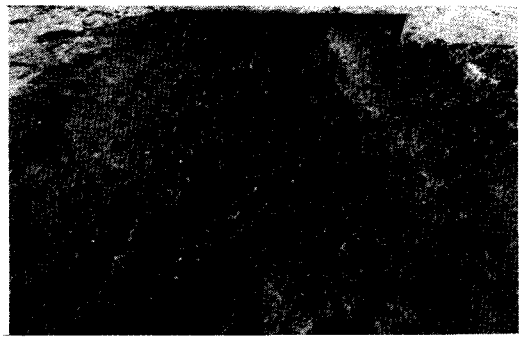


Fig.20
女塚２号墳
平面図

ＰＬ．13　女塚２号墳全景

a



b

c

d

PL. 14　墳丘北面遺物出土状況

1号墳前方部前面外堤から6m西に周溝外槨が位置し、1号墳の前方部前面を隠すように存在する。

径21～23.5mを測る、円墳である。墳丘は、南東部で2.5m、北西部で5m幅のテラスをもつ。テラス内円丘部は、径14.5mを測る。

円丘部は、テラス上5～10cm上位で削平され、高さは不明である。主体部についても同様の理由で不明である。

テラスの先端部、周溝への角度変換線上には、円筒埴輪が樹立され、全周する。円筒埴輪は、50cm間隔で樹立されているが、溝等の構造を倶えていない。北辺では円筒埴輪列外面にさらにテラスが伸び、多量の形象埴輪が樹立されている。形象埴輪の出土は、墳近北辺に限られ、他からは出土していない。

周溝への落ち込みは、北辺がなだらかである他は急である。北辺の形象埴輪は、このなだらかな傾斜に沿って検出されている。形象埴輪は、人物、馬形、鹿形、猪形、その他が見られ、同形内においても、かなりバラエティーに富んでいる。

周溝は、西部で最も狭く3.5m、北東部で最も広く6.5mの幅をもつ。深さは、テラス面から50cmを測る。外提からの深さも同様である。

墳丘部は、白色粘土、青色粘土を中心にして、墳央部からテラスにかけて斜に積み上げられている。周溝内覆土は、上層では粘土層、下層では砂層及び泥炭層が主体となる。周溝及び、周溝外には、浅間A・B火山灰が堆積している。

出土した円筒埴輪は、二段凸帯のもののみであり、基部の高低、外面及び内面整形に差がみられ、大別すると、二種類に区分されるようである。

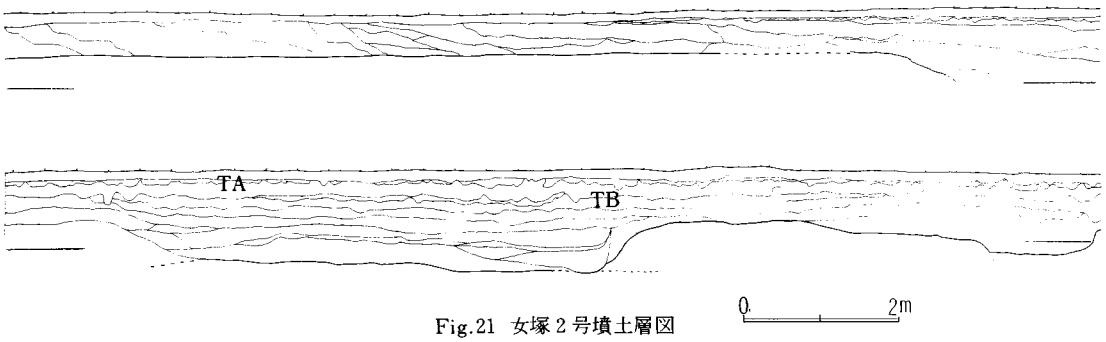


Fig.21　女塚2号墳土層図

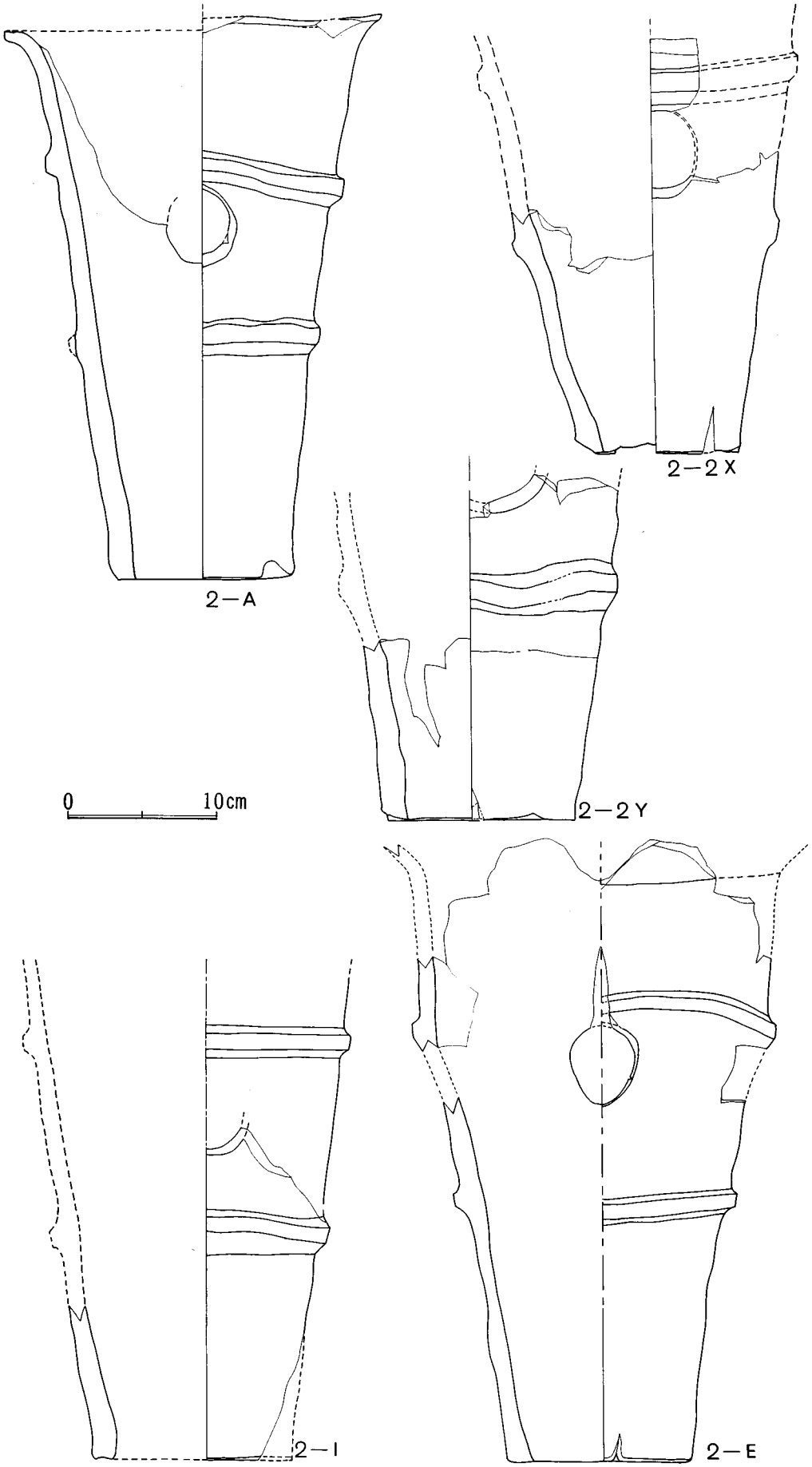


Fig.22
女塚2号墳出
土遺物実測図
(1) 円筒埴輪

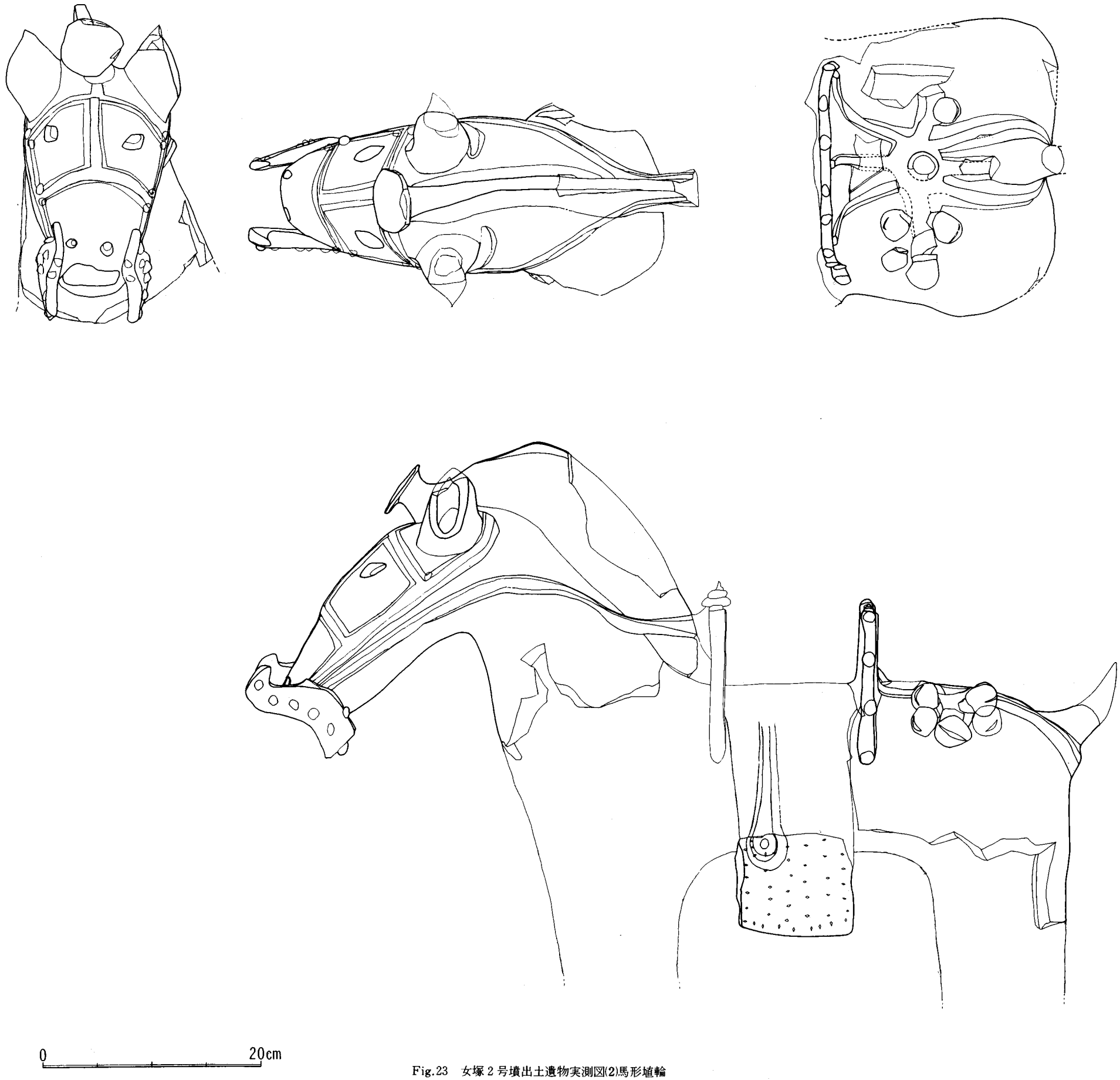


Fig.23　女塚２号墳出土遺物実測図(2)馬形埴輪

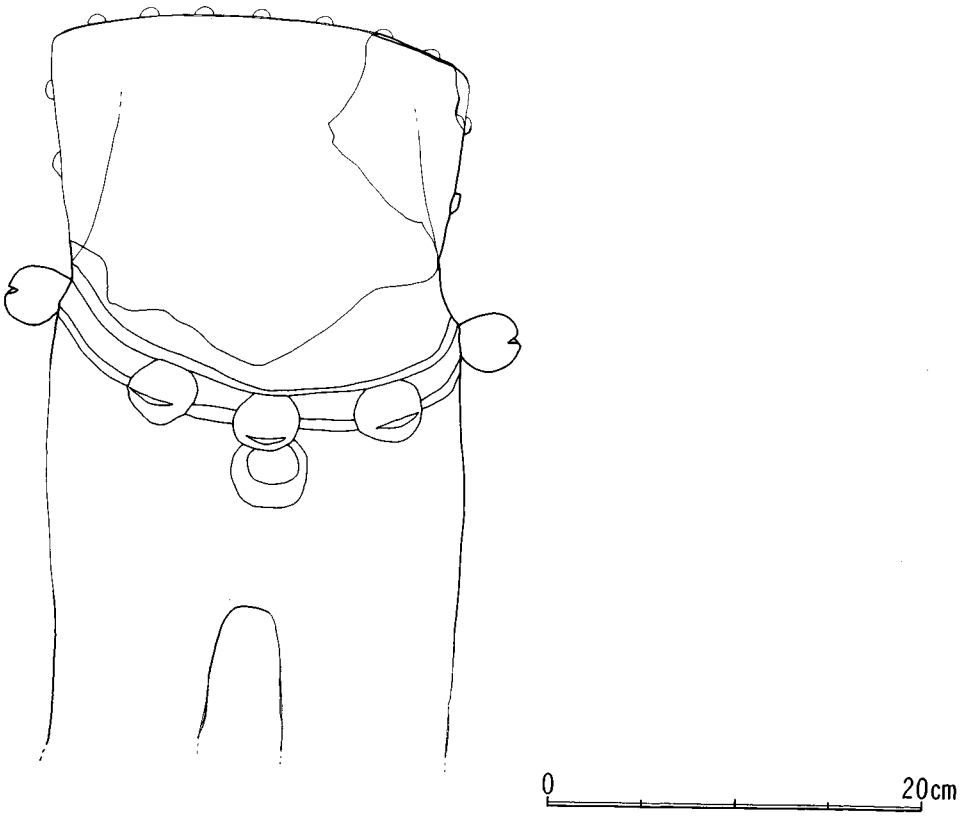
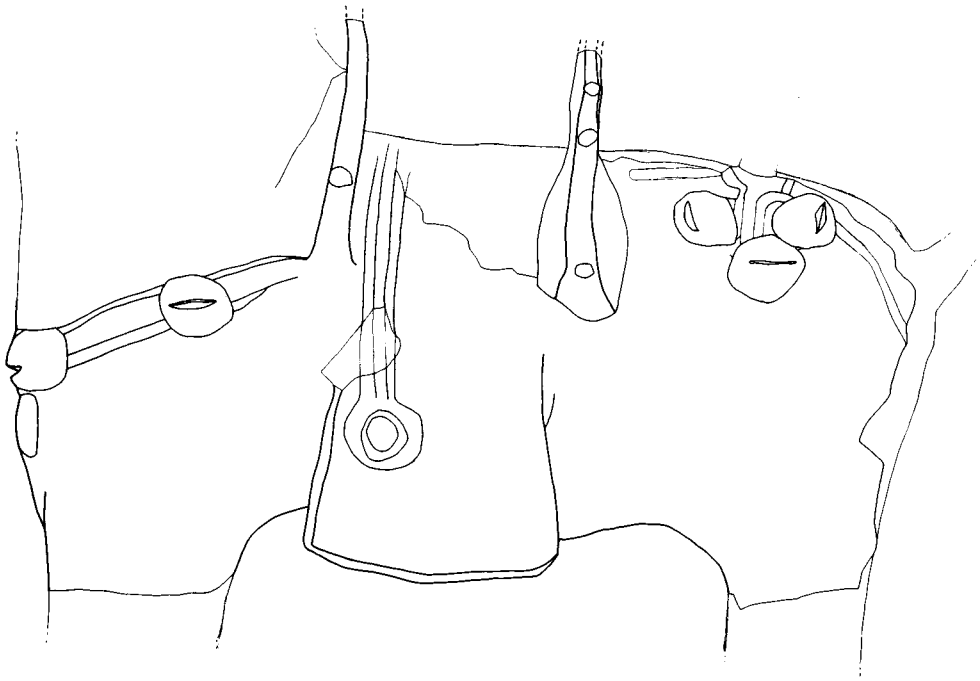
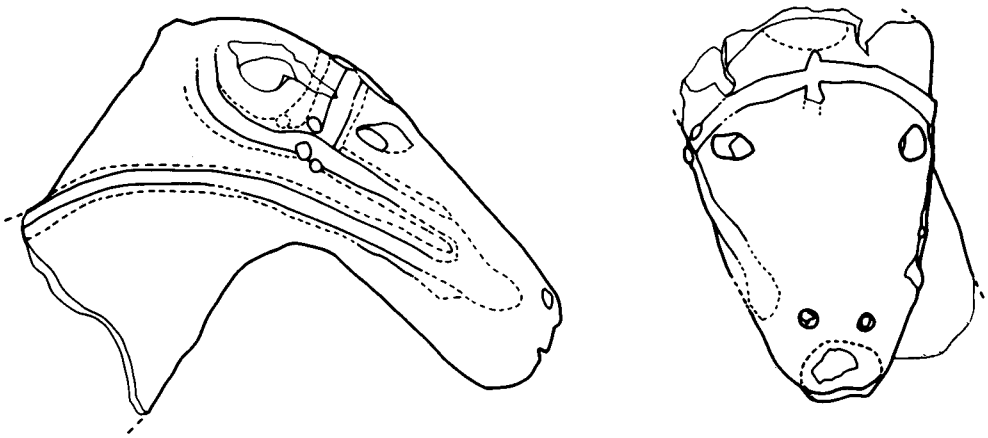
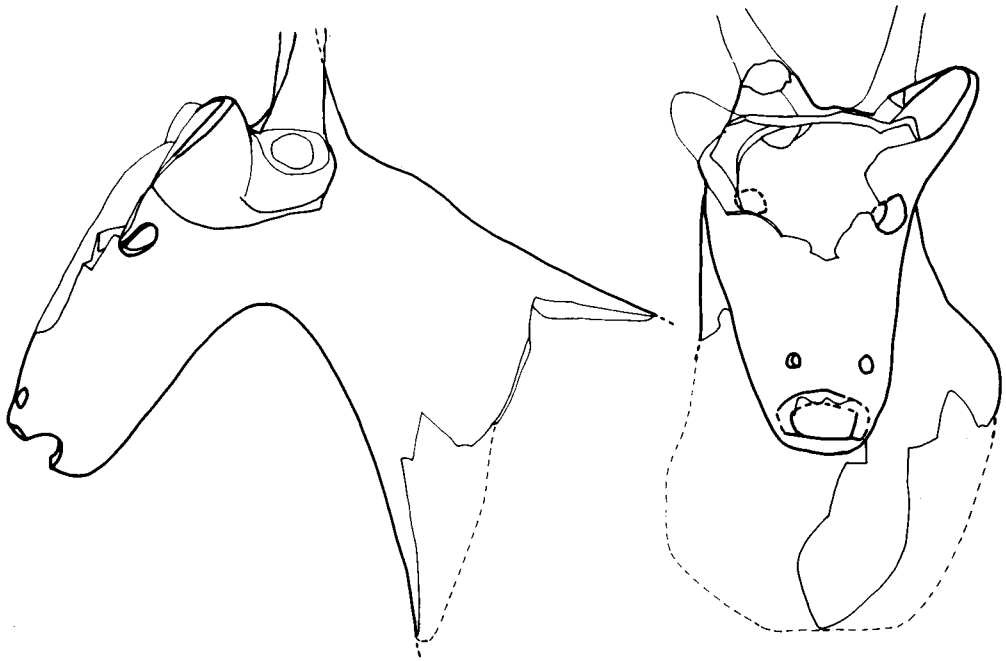


Fig.24
女塚2号墳出
土遺物実測図
(3) 馬形埴輪



PL. 15　女塚2号墳出土遺物(1)　動物・円筒埴輪





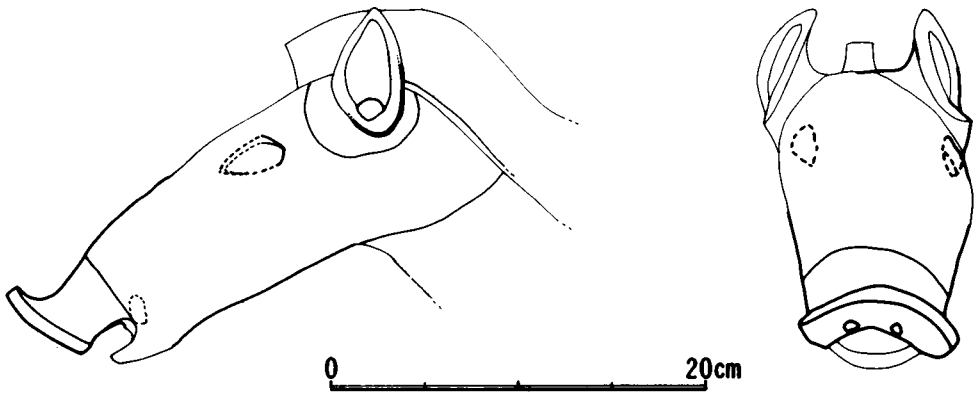


Fig.25
女塚2号墳出土遺物実測図
(4) 馬形埴輪
動物埴輪

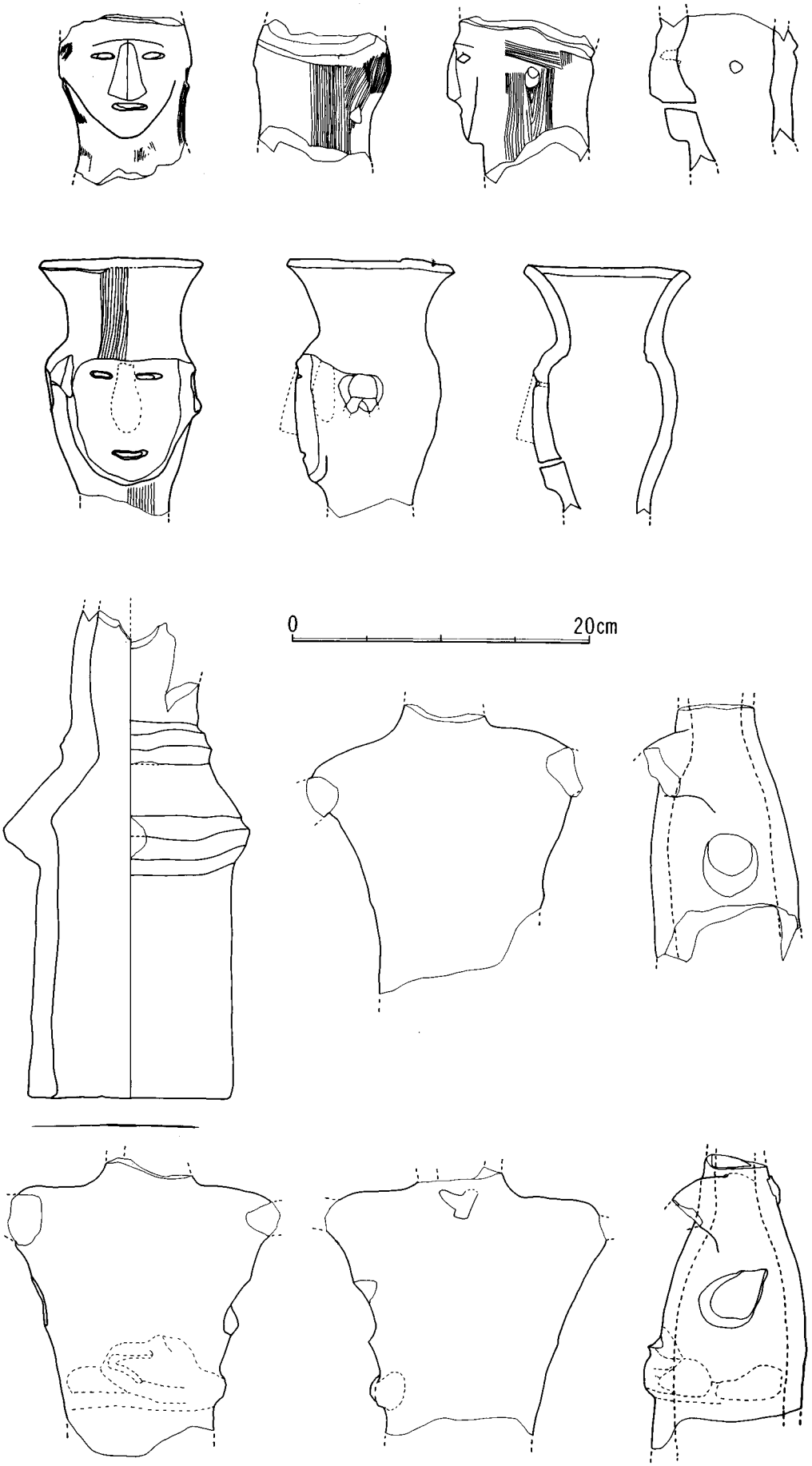
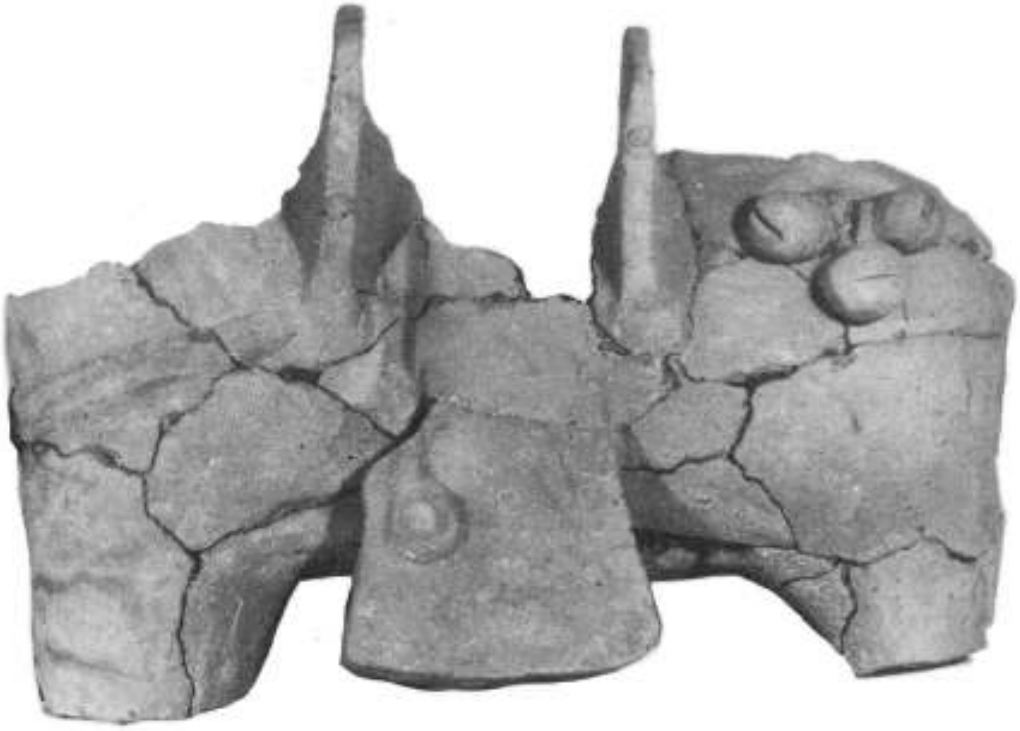


Fig.26
女塚２号墳出
土遺物実測図
(5) 人物埴輪

Pl. 16　女塚2号墳出土遺物(2)　馬形埴輪頭部



PL.17　女塚２号墳出土遺物3）馬形埴輪胴部

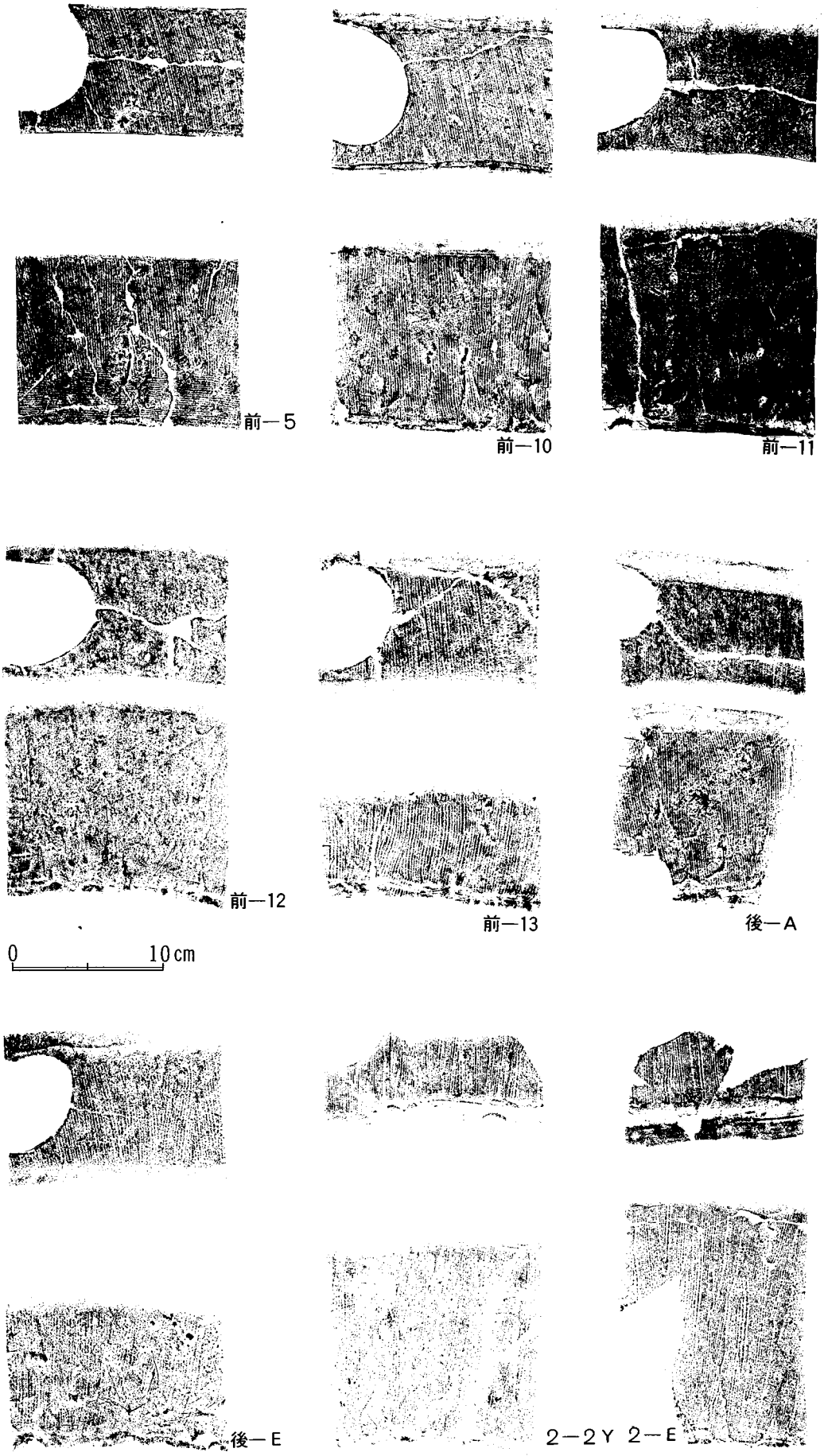


Fig.27
女塚1、2号
墳出土円筒埴
輪拓影図

PL.18　女塚2号墳出土遺物(4)　人物埴輪・及び周辺出土遺物

c．女塚４号墳

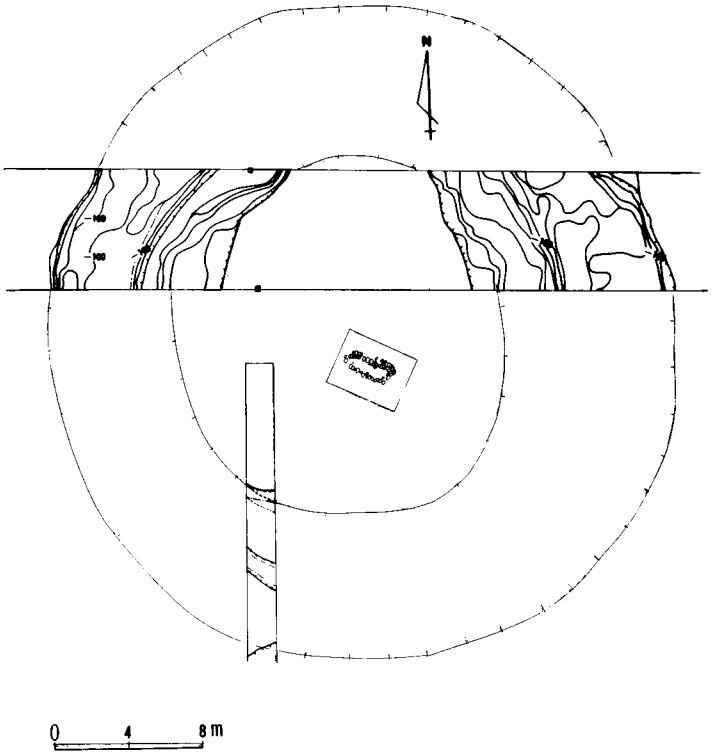


Fig.28　女塚４号墳平面図

PL.19　女塚４号墳全景

２号墳の南西82m、東西に新設された道路下に位置する。墳丘はすでに削平され、埴輪が樹立された状態では残存されていない。

墳丘裾部は、様々な形に攪乱され、不整形を呈するが、直径18m を測る円墳である。調査は、新設道路部分及び道路から南下する新設水路の部分に限られているが、ほぼ墳丘の形態は捉えられたと思う。

墳丘及び、周溝覆土の基盤層は、青白色粘土層であり、墳丘上位の残存層は、白色粘土含有灰渇色粘土及び、青灰色粘土である。周溝含土は灰渇色粘土が主体となり、含有物によって９層に区分される。周溝及び周溝外には、浅間Ａ・Ｂ火山灰が堆積する。周溝覆土部は、他の遺溝に切断されている部分がある。

周溝は、6.30～9.0m の幅を持ち、内面はゆるやかに、外面は急に傾斜している。周溝底部中央は、幅１m 前後で更に一段落ち込み溝をなす。周溝は、墳丘裾部から50cmの深さをもち、中央部の細溝は60cmの深さをもつ。

墳丘中央やや南寄に、Ｎ－115－Ｅの主軸方位を示す主体部が存在する。主体部は長軸3.2m、短軸は1.3～１、６の範囲に石組がなされ、内法は、長軸2.2m、艫側幅は50cm、舳先幅30cmを測る、いわゆる、舟形礫槨である。横断面は、略Ｕ字形を呈している。壁面は最下段に10×25cm大の長円形礫を小口面を内面にそろえて、一列もしくは二列に配している。同礫は３段まで確認されており、最上礫が、最も長大となる。３段礫までの高さは25cmを測る。長円形礫の間、もしくは外面には、小礫を多量につめて壁体を補強している。

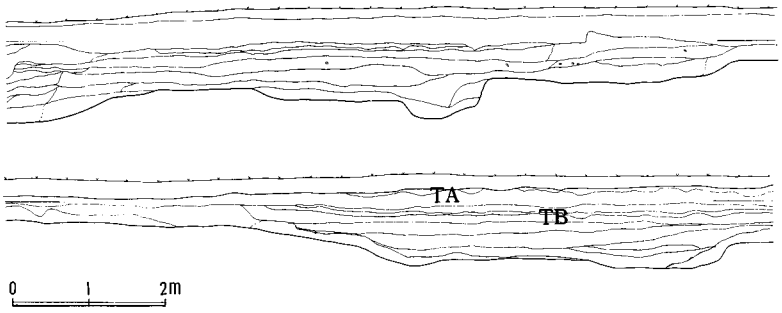
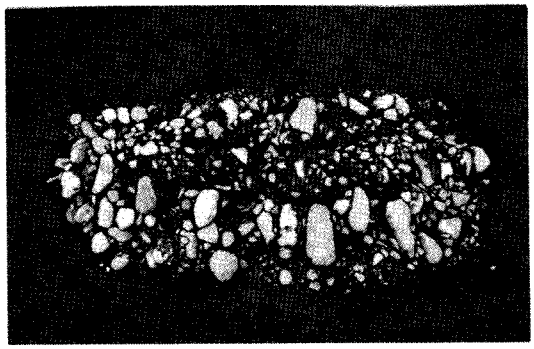
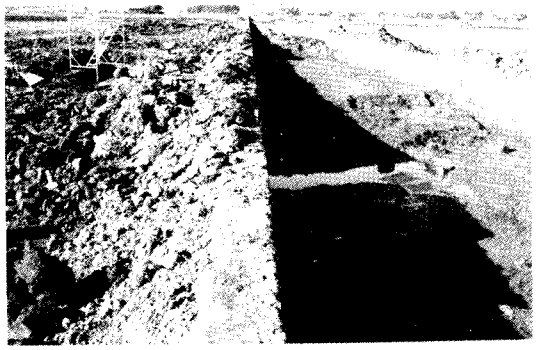
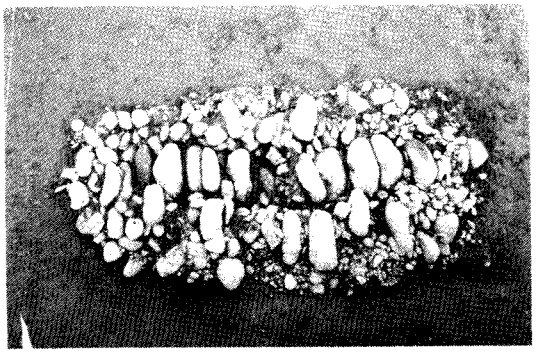


Fig.29 女塚４号墳
土層図


a


b

c


d

ＰＬ．20　女塚４号墳主体部

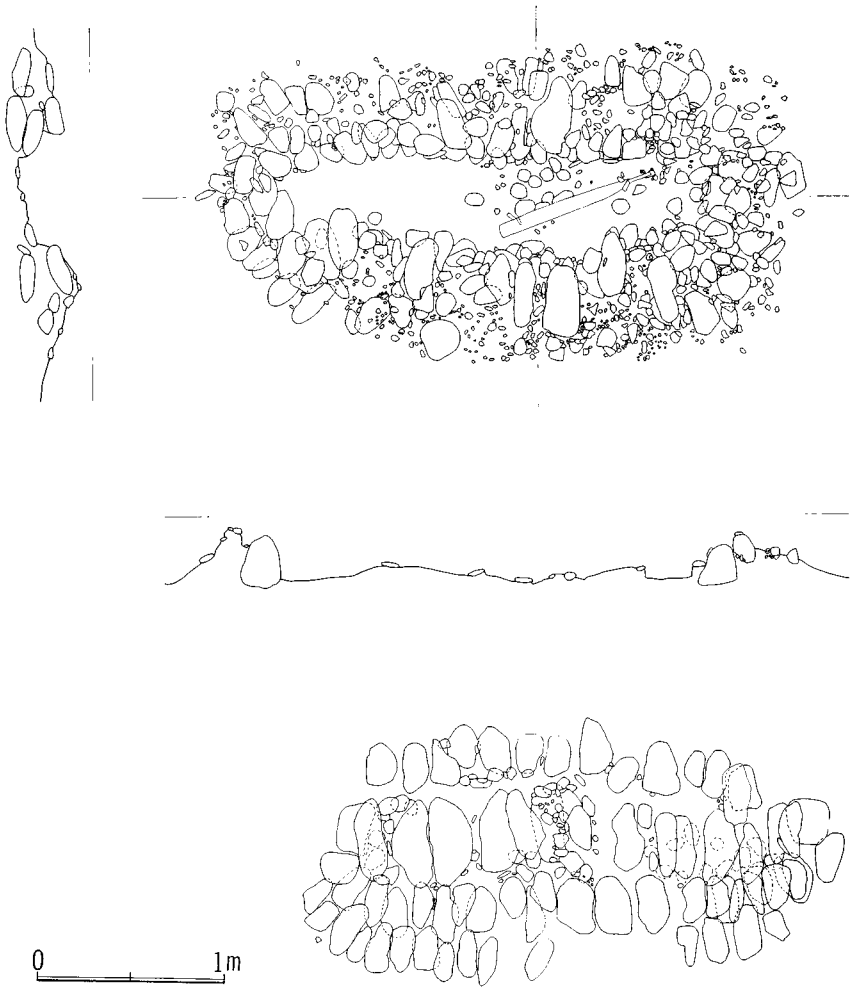
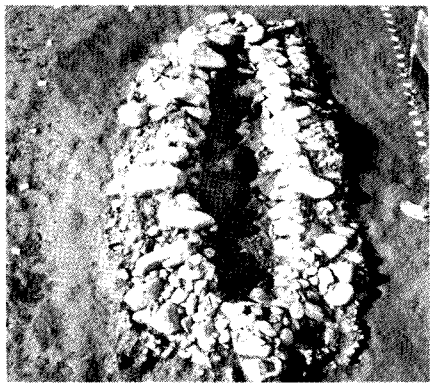


Fig.30 女塚4号墳
主体部


a

PL. 21
女塚4号墳主体部
a 蓋石除去後
b 遺物出土状況
c・d 断面

b

c

d

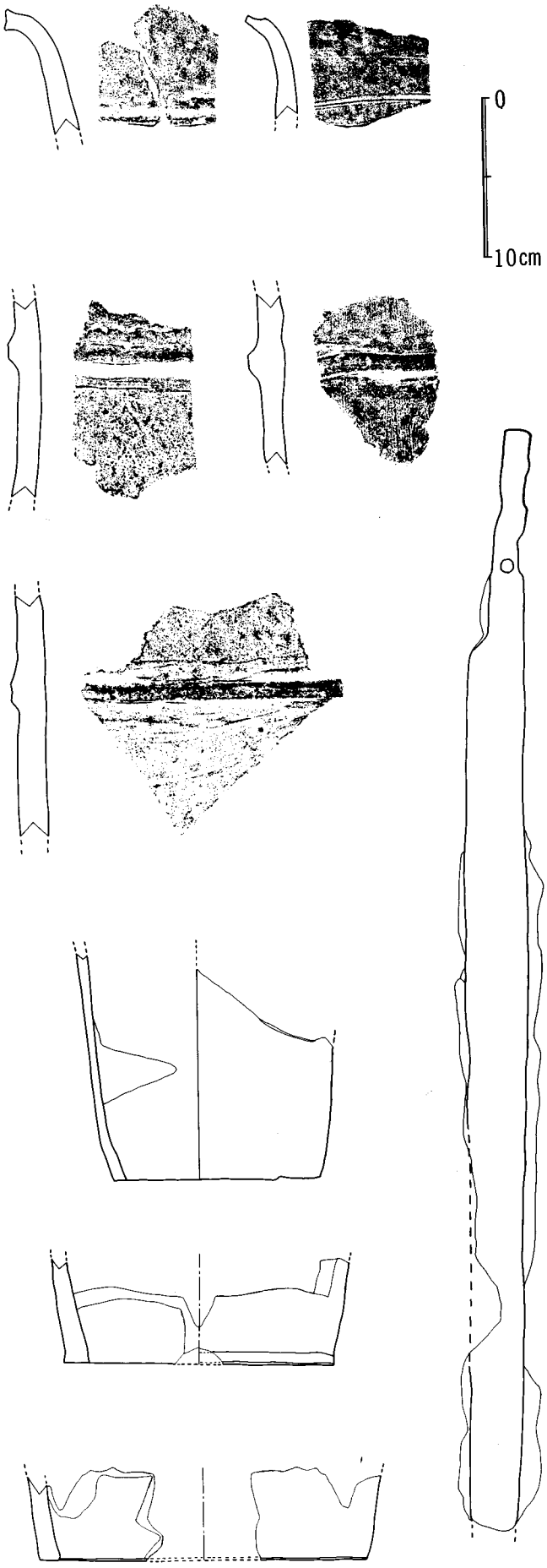


Fig.31 女塚４号墳出土遺物実測図

礫槨内には、壁に利用されている長円形礫より一周り大きな、10×30cmから、20×45cm大の礫が13個並列状態で検出されている。蓋石が落ち込んだものと思われる。

床面は、偏平円礫が敷かれているが、艫側と舳先側で大小の差があり、前者が大である。艫側端部は、円礫が斜に立てられ、頭を受ける状態となっている。

落ちた蓋石の下面には、艫側で人骨と直刀が検出されている。直刀は、艫の片隅から中央部にかけて、斜に置かれ、柄の中央部から歯が検出されている。又、直刀と人骨の腕に当たる部分とが、直交する状況を呈している。これらの事から、直刀は、被葬者の右頭部から、左脇腹にかけて、抱かれている形で置かれたものと思われる。

出土した直刀は、錆化がかなり進行し、残存状況はあまり良くないが、レントゲン撮影によって、基部に目釘穴が判明するとともに、刃身幅も確認されたものである。

埴輪は、中型品が多く、基部を薄くつくる点に特色をもつ、円筒埴輪のみであり、形象埴輪は検出されていない。樹立した状態で検出されたものは無く、全て破片であるが、全体から満遍なく出土しており、恐らく、全周したであろうと思われる。

以上の、女塚１号、２号、４号墳の他に、３号墳、５号墳が確認されている。

３号墳は、２号墳の南10m に位置し、直径約15m 、溝幅約3.2m を測る円墳である。周溝の一部と、墳丘を横断する幅30cmのパイプ埋設溝部分を調査したにすぎない。

５号墳は、新設東西道路北側のパイプ埋設部に周溝外槨の南端が検出され、古墳址であると確認されたものである。よって、墳丘規模は、周辺の調査された区域から、収束する状況で逆算し、割り出したものであり、それは、周溝を含めて直径21m 前後であろう。

V．周辺部の調査

調査は、古墳を中心にして実施したが、新設のパイプ埋設溝、水路等の設定地には、トレンチを配し（溝掘削工事の立合いを含む）、遺構の存在を確認していった、旧地形において池沼地であった部分には、浅間B火山灰層が堆積しており、この地は地表下1.5m以内（新設溝の深さ）には文化層が確認されていない。

このような調査の結果、中条古墳群中の今井支群が立地する、半月状の自然堤防が確認され、その範囲は、聖天塚古墳（第2図中No11）から東南方向へ伸び、女塚1・2号墳の位置するところでは、南北に各々200mにおよぶ。女塚1・2号墳の位置から方向を東へ転じ、鎧塚古墳（第2図中No17）から、中島遺跡（第1図中No 9）へと連続していく。この連続は、池沼地が複雑に入り込み、単純な形状を呈するものでない。

女塚1・2・4号墳の南は、このうちでも特に、遺構・遺物の分布密度が濃い地点である。南北の新設溝（250mの長さであり、そのうち南100mは旧池沼地）では、竪穴住居址4軒、竪穴状遺構6基、溝3条が検出されている。幅1m未満の調査であるので、形状、規模等について詳細は不明である。尚、遺構の掘り込み面が地表下40cmであることが確認された為、面の削平工事については、土地改良事務所と協議のすえ中止し、遺跡の保存が計られた。当地区からの出土遺物は、古墳時代中期から後期に及ぶ。また、聖天塚周辺では、奈良・平安時代の遺物が集中しており、時代によって利用地の変遷があったことを想起させる。

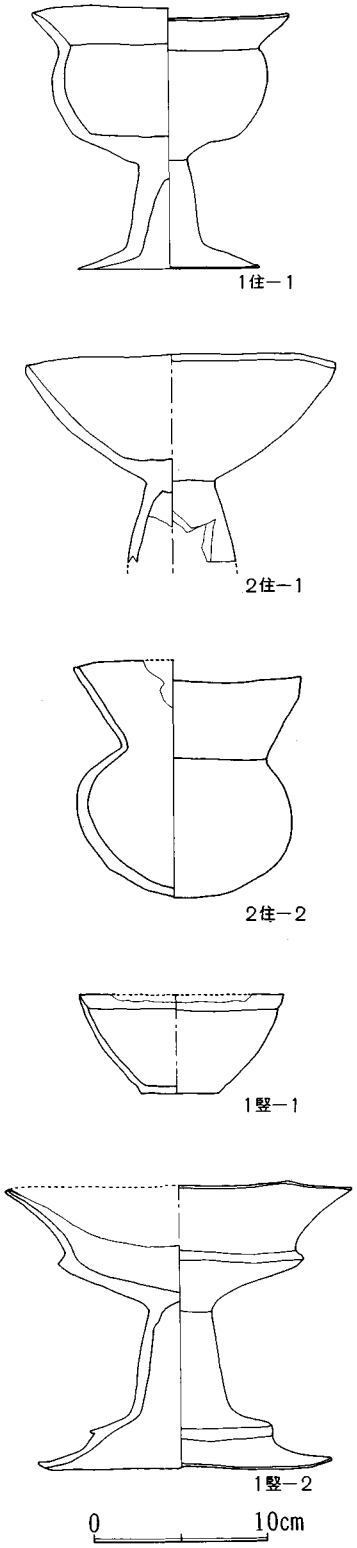


Fig.32
周辺部出土遺物実測図

Ⅵ．ま　と　め

今回の調査は、一基であると思われた女塚古墳の周辺部にも四基の古墳が発見され、それだけでも充分の成果があがったと思われる。その内で1号墳は、二重周溝をもつ帆立貝式の前方後円墳であり、出土した土器が、東200mに位置する同型の鎧塚古墳一次墓前祭祀址を構成する土器群と同一型式であることが確認され、当地における初現的な古墳の様相を物語る重要な資料となった。また、4号墳では、当地ではあきらめられていた主体部が、埴輪列より下面で検出され、貴重な資料として重視される。1号墳前方部あるいは、2号墳北面で、集中的に検出された形象埴輪群は、その構成、配置、個々の形態等、興味ある様相を呈している。各古墳の年代は、古墳形態、出土遺物、火山灰を含む土層状況、主体部等から、現時点では一応、1号墳が5世紀末、4号墳が6世紀前葉、2号墳が6世紀前半と考えている。しかし、整理も完了していない現時点では、その可能性があるという段階であって、今回の問題点は全て、今後の研究課題としておきたい。

昭和58年３月発行
昭和57年度　熊谷市埋蔵文化財調査報告
女　塚
編集発行　埼玉県熊谷市教育委員会
印　刷　株式会社　博　文　社